

（案）
第三部
農薬評価書

メチルイソチオ
シアネート

2015年1月21日
食品安全委員会農薬専門調査会

目 次

1	目 次	頁
2		頁
3	○ 審議の経緯.....	3
4	○ 食品安全委員会委員名簿.....	3
5	○ 食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿.....	3
6	○ 要 約.....	6
7		
8	I. 評価対象農薬の概要.....	7
9	1. 用途.....	7
10	2. 有効成分の一般名.....	7
11	3. 化学名.....	7
12	4. 分子式.....	7
13	5. 分子量.....	7
14	6. 構造式.....	7
15	7. 開発の経緯.....	7
16		
17	II. 安全性に係る試験の概要.....	8
18	1. 動物体内運命試験.....	8
19	(1) ラット①.....	8
20	(2) ラット②.....	13
21	(3) ラット③.....	13
22	(4) ラット④.....	13
23	(5) イヌ.....	15
24	2. 植物体内運命試験.....	16
25	(1) トマト.....	16
26	(2) だいこん.....	17
27	(3) トマト、レタス及びからしな.....	18
28	3. 土壌中運命試験.....	22
29	(1) 好氣的土壌中運命試験.....	22
30	(2) 土壌吸着試験.....	24
31	4. 水中運命試験.....	24
32	(1) 加水分解試験①.....	24
33	(2) 加水分解試験②.....	24
34	(3) 水中光分解試験①.....	25
35	(4) 水中光分解試験②.....	26
36	5. 土壌残留試験.....	26
37	6. 作物残留試験.....	27
38	7. 一般薬理試験.....	27

1	8. 急性毒性試験	29
2	9. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験	31
3	10. 亜急性毒性試験	31
4	(1) 90 日間亜急性毒性試験（ラット）①	31
5	(2) 90 日間亜急性毒性試験（ラット）②	32
6	(3) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）①	32
7	(4) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）②	33
8	(5) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）③	33
9	(6) 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）	33
10	(7) 90 日間亜急性神経毒性試験（ラット）	34
11	(8) 90 日間亜急性吸入毒性試験（ラット）	35
12	(9) 1 か月間亜急性経皮毒性試験（ラット）①	35
13	(10) 1 か月間亜急性経皮毒性試験（ラット）②	35
14	11. 慢性毒性試験及び発がん性試験	35
15	(1) 1 年間慢性毒性試験（イヌ）	35
16	(2) 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）	36
17	(3) 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（マウス）	36
18	12. 生殖発生毒性試験	37
19	(1) 3 世代繁殖試験（ラット）	37
20	(2) 2 世代繁殖試験（ラット）	37
21	(3) 発生毒性試験（ラット）①	38
22	(4) 発生毒性試験（ラット）②	38
23	(5) 発生毒性試験（ウサギ）①	39
24	(6) 発生毒性試験（ウサギ）②	39
25	(7) 発生毒性試験（ウサギ）③	39
26	13. 遺伝毒性試験	39
27	14. その他の試験	41
28	(1) 消化管に及ぼす影響	41
29		
30	Ⅲ. 食品健康影響評価	42
31		
32	・別紙 1：代謝物/分解物略称	51
33	・別紙 2：検査値等略称	52
34	・別紙 3：作物残留試験成績	53
35	・参照	58
36		
37		

1 <審議の経緯>

- 1976年 1月 13日 初回農薬登録
- 2005年 11月 29日 残留農薬基準告示（参照 1）
- 2013年 6月 11日 厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安 0611 第 15 号）、関係書類の接受（参照 2～9）
- 2013年 6月 17日 第 478 回食品安全委員会（要請事項説明）
- 2013年 12月 6日 第 33 回農薬専門調査会評価第一部会
- 2014年 10月 29日 第 40 回農薬専門調査会評価第一部会
- 2014年 11月 28日 第 41 回農薬専門調査会評価第一部会
- 2015年 1月 21日 第 118 回農薬専門調査会幹事会

2

3 <食品安全委員会委員名簿>

（2012年7月1日から）

- 熊谷 進（委員長）
- 佐藤 洋（委員長代理）
- 山添 康（委員長代理）
- 三森国敏（委員長代理）
- 石井克枝
- 上安平冽子
- 村田容常

4

5 <食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿>

（2014年3月31日まで）

- ・幹事会

納屋聖人（座長）	上路雅子	松本清司
西川秋佳*（座長代理）	永田 清	山手丈至**
三枝順三（座長代理**）	長野嘉介	吉田 緑
赤池昭紀	本間正充	
- ・評価第一部会

上路雅子（座長）	津田修治	山崎浩史
赤池昭紀（座長代理）	福井義浩	義澤克彦
相磯成敏	堀本政夫	若栗 忍
- ・評価第二部会

吉田 緑（座長）	桑形麻樹子	藤本成明
松本清司（座長代理）	腰岡政二	細川正清
泉 啓介	根岸友恵	本間正充

- ・評価第三部会

三枝順三 (座長)	小野 敦	永田 清
納屋聖人 (座長代理)	佐々木有	八田稔久
浅野 哲	田村廣人	増村健一
- ・評価第四部会

西川秋佳* (座長)	川口博明	根本信雄
長野嘉介 (座長代理*; 座長**)	代田真理子	森田 健
山手丈至 (座長代理**)	玉井郁巳	與語靖洋
井上 薫**		* : 2013年9月30日まで ** : 2013年10月1日から

1

(2014年4月1日から)

- ・幹事会

西川秋佳 (座長)	小澤正吾	林 真
納屋聖人 (座長代理)	三枝順三	本間正充
赤池昭紀	代田真理子	松本清司
浅野 哲	永田 清	與語靖洋
上路雅子	長野嘉介	吉田 緑
- ・評価第一部会

上路雅子 (座長)	清家伸康	藤本成明
赤池昭紀 (座長代理)	林 真	堀本政夫
相磯成敏	平塚 明	山崎浩史
浅野 哲	福井義浩	若栗 忍
篠原厚子		
- ・評価第二部会

吉田 緑 (座長)	腰岡政二	本間正充
松本清司 (座長代理)	佐藤 洋	根岸友恵
小澤正吾	杉原数美	山本雅子
川口博明	細川正清	吉田 充
桑形麻樹子		
- ・評価第三部会

三枝順三 (座長)	高木篤也	中山真義
納屋聖人 (座長代理)	田村廣人	八田稔久
太田敏博	中島美紀	増村健一
小野 敦	永田 清	義澤克彦
- ・評価第四部会

西川秋佳 (座長)	佐々木有	本多一郎
長野嘉介 (座長代理)	代田真理子	山手丈至
井上 薫	玉井郁巳	森田 健
加藤美紀	中塚敏夫	與語靖洋

2

3

1 <第 33 回農薬専門調査会評価第一部会専門参考人名簿>

林 真 平塚 明

2

3

1
2 要 約
3

4 殺線虫剤、殺菌剤、殺虫剤及び除草剤である「メチルイソチオシアネート (MITC)」
5 (CAS No. 556-61-6) について、農薬抄録及び各種資料（豪州及び EU）を用いて食
6 品健康影響評価を実施した。

7 評価に用いた試験成績は、動物体内運命（ラット及びイヌ）、植物体内運命（トマ
8 ト、だいこん等）、作物残留、亜急性毒性（ラット、マウス及びイヌ）、亜急性神経
9 毒性（ラット）、慢性毒性（イヌ）、慢性毒性/発がん性併合（ラット及びマウス）、
10 3 世代及び 2 世代繁殖（ラット）、発生毒性（ラット及びウサギ）、遺伝毒性等の試
11 験成績である。

12 各種毒性試験結果から、MITC 投与による影響は、主に体重（増加抑制）、肝臓（重
13 量増加、肝細胞脂肪変性等）及び前胃（肥厚等）に認められた。神経毒性、発がん性、
14 繁殖能に対する影響、催奇形性及び生体にとって問題となる遺伝毒性は認められな
15 かった。

16 各試験で得られた無毒性量のうち最小値は、イヌを用いた 90 日間亜急性毒性試験
17 及び 1 年間慢性毒性試験の 0.4 mg/kg 体重/日であったことから、これを根拠として、
18 安全係数 100 で除した 0.004 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量（ADI）と設定した。

19 また、MITC の単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響に対する無毒性
20 量のうち最小値は、マウス及びウサギを用いた一般薬理試験の 10 mg/kg 体重であっ
21 たことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.1 mg/kg 体重を急性参照用
22 量（ARfD）と設定した。
23

1 **I. 評価対象農薬の概要**

2

3 **1. 用途**

4 殺線虫剤・殺菌剤・殺虫剤・除草剤

5

6 **2. 有効成分の一般名**

7 和名：メチルイソチオシアネート

8 英名：methyl isothiocyanate (ISO)

9

10 **3. 化学名**

11 **IUPAC**

12 和名：メチルイソチオシアネート

13 英名：methyl isothiocyanate

14

15 **CAS (No. 556-61-6)**

16 和名：イソチオシアネートメタン

17 英名：isothiocyanatomethane

18

19 **4. 分子式**

20 C_2H_3NS

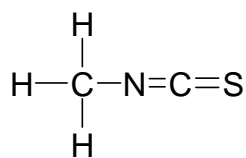
21

22 **5. 分子量**

23 73.11

24

25 **6. 構造式**



26

27 **7. 開発の経緯**

28 メチルイソチオシアネート (MITC) は、1958 年にドイツ Schering AG 社によ
29 り開発された。本剤は土壌処理により速やかにガス化して拡散し、土壌中の病原菌、
30 害虫、線虫及び雑草種子に対して薬効を示すことが知られている。国内では、1976
31 年に初めて農薬登録された。海外においては、ヨーロッパ及び北米で MITC 単剤及
32 び D-D との混合剤の登録が行われたが、2006 年までに全ての登録は失効している。
33 ポジティブリスト制度導入に伴う暫定基準が設定されている。

34

11 II. 安全性に係る試験の概要

12 各種運命試験 [II. 1~4] は、メチルイソチオシアネート (MITC) のメチル基の
 13 炭素を ^{14}C で標識したもの（以下「[met- ^{14}C]MITC」という。）、イソチオシアノ
 14 基の炭素を ^{14}C で標識したもの（以下「[iso- ^{14}C]MITC」という。）及び硫黄を ^{35}S
 15 で標識したもの（以下「[iso- ^{35}S]MITC」という。）を用いて実施された。放射能
 16 濃度及び代謝物濃度は、特に断りがない場合は比放射能（質量放射能）から MITC
 17 に換算した値 (mg/kg 又は $\mu\text{g/g}$) を示した。代謝物/分解物略称及び検査値等略称は
 18 別紙 1 及び 2 に示されている。

10 1. 動物体内運命試験

11 (1) ラット①

12 ①吸収

13 a. 血液中濃度推移

14 Wistar ラット（一群雄 4 又は 5 匹）に [met- ^{14}C]MITC を 20 mg/kg 体重で単
 15 回経口投与後 24 時間までの連続採血で得られた血液試料及び分布試験 [1. (1)
 16 ②] で投与後 28 日まで経時的に採取した血液試料中の放射能を測定して、血液
 17 中濃度推移が検討された。

18 薬物動態学的パラメータは表 1 に示されている。（参照 2）

20 表 1 薬物動態学的パラメータ

T_{\max} (hr)	0.25~1
C_{\max} ($\mu\text{g/g}$)	18.6~20.5
$T_{1/2}$ α 相 (hr)	8.05~8.2
$T_{1/2}$ β 相 (day)	17.7

22 b. 吸収率

23 尿糞及び呼気中排泄試験 [1. (1)④a.] より得られた投与後 24時間7日間の尿
 24 及び呼気中の放射能の合計から、MITC の吸収率は少なくとも 7784.0%と考えら
 25 れた永田専門委員修文。（参照 2）

27 ②分布

28 a. 体内分布

29 Wistar ラット（一群雄 3 又は 5 匹）に [met- ^{14}C]MITC を 20 mg/kg 体重で単
 30 回経口投与し、体内分布試験が実施された。

31 主要臓器及び組織における残留放射能濃度は表 2 に示されている。

32 放射能は、肝臓、腎臓及び赤血球への顕著な移行が認められるとともに、投与
 33 後初期の脂肪組織を除く全ての組織で血漿より高い濃度が認められた。この対血
 34 漿レベルは全組織とも経時的に上昇し、高い組織親和性が認められた。各組織か

らの放射能の消失は、血球、肝臓、腎臓、脳、脂肪組織等で緩慢であった。投与 28 日後においても、2.8%TRR が体組織に保持され、ラット体内における比較的高い残留性が示唆された。（参照 2）

表 2 主要臓器及び組織における残留放射能濃度（ $\mu\text{g/g}$ ）

投与後時間	臓器及び組織中濃度
3 時間	胃(311)、血球(33.3)、全血(15.1)、肝臓(14.6)、腸管(12.5)、腎臓(12.5)、脾臓(9.59)、膵臓(8.16)、肺(6.74)、骨髄(5.94)、血漿(1.44)
1 日	肝臓(7.55)、骨髄(6.61)、甲状腺(5.73)、胃(4.99)、腸管(4.35)、血球(4.14)、腎臓(3.92)、脾臓(3.86)、副腎(3.80)、肺(3.73)、被毛(3.52)、血漿(0.72)
7 日	被毛(4.81)、肝臓(1.81)、副腎(1.51)、腎臓(1.48)、甲状腺(1.38)、血球(1.34)、肺(1.31)、脳下垂体(1.19)、胸腺(1.14)、膵臓(1.10)、精囊(1.07)、心臓(1.06)、脾臓(1.01)、涙腺(1.01)、カーカス ¹ (1.01)、骨格筋(0.85)、精巣(0.67)、骨髄(0.62)、胃(0.62)、全血(0.61)、精巣上体(0.59)、血漿(0.09)
14 日	被毛(5.63)、血球(0.86)、肝臓(0.62)、肺(0.62)、カーカス(0.61)、心臓(0.59)、精囊(0.52)、腎臓(0.51)、骨格筋(0.51)、脳下垂体(0.48)、血漿(0.03)
28 日	被毛(3.91)、血球(0.63)、カーカス(0.45)、全血(0.27)、腎臓(0.25)、涙腺(0.25)、肝臓(0.24)、血漿(<0.02)

注) 各数値は 5 例の平均値（投与後 28 日のみ 3 例の平均値）を示す。

b. 組織残留物と高分子物質への結合

体内分布試験 [1. (1)②a.] における投与 3 時間後の肝臓中の親油性物質の有無について、*n*-ヘキサン抽出による検討が実施された。抽出された放射能は 1.1%TRR と低レベルであった。この抽出物は減圧濃縮により 97%が消失した（揮発性物質）ことから、未変化の MITC と推察された。

体内分布試験 [1. (1)②a] の投与 3 時間から 7 日後の 7 種の臓器及び組織を用い、~~TCA 不溶性及び有機溶媒非抽出性の~~タンパク質等の細胞内高分子物質からなる残渣中に検出される放射能 (TCA 不溶性及び有機溶媒非抽出性) について検討が行われた 永田専門委員修文。

臓器及び組織中の高分子物質への結合放射能は表 3 に示されている。

血漿及び血球中では約 80%TRR 以上が抽出可能であったが、肝臓、腎臓、精巣、精囊及び精巣上体+輸精管では約 30~60%TRR が抽出不能であり、これら組織中残留放射能の細胞内高分子物質への結合が示唆された。この結合残渣の形成に伴い、投与 3 時間後の肝グルタチオン量は対照群の 74%に低下していた。

(参照 2)

¹ 組織、臓器を取り除いた残渣のことをカーカスという（以下同じ。）。

1
2

表 3 臓器及び組織中の高分子物質への結合放射能

臓器・組織	結合放射能					
	投与 3 時間後		投与 1 日後		投与 7 日後	
	µg/g	%TRR	µg/g	%TRR	µg/g	%TRR
肝臓	5.67	38.1	3.50	45.5	1.04	51.5
腎臓	4.94	40.3	2.77	48.8	0.59	41.6
精巣	0.57	35.8	0.46	39.9	0.20	30.5
精囊	0.60	34.4	1.29	62.3	0.52	52.1
精巣上体+輸精管	0.85	57.0	0.50	47.5	0.21	35.9
血球	3.91	11.7	2.70 [#]	31.0 [#]	0.23	16.9
血漿	-	-	0.15 [#]	19.9 [#]	-	-

3 # : 2 例の平均値 (ほかは 5 例の平均値)

4 -: 測定せず

5
6c. *In vitro* 結合試験7 Wistar ラットより調製した肝ホモジネート 9,000 g 上清又はミクロソーム画
8 分と [met-¹⁴C]MITC との結合試験が実施された。9 表 4 に [met-¹⁴C]MITC の生体高分子物質との *in vitro* 共有結合試験結果が示さ
10 れている。11 9,000 g 上清液では煮沸による失活化により、添加 [met-¹⁴C]MITC 量の 54% が
12 結合して 5.6 倍に、またミクロソーム画分では 1.5 倍にそれぞれ増加した。低分
13 子 SH 化合物のシステインは失活酵素系において、また、グルタチオンは、**native**
14 な酵素系と失活酵素系の両系において**結合**に対する抑制効果を示し、その作用は
15 **native** 酵素系においてより顕著であった。以上の結果から、TCA 不溶性の蛋白
16 を主体とする残渣中への放射能の取り込みは未変化の MITC による非酵素的な
17 結合によるものと考えられ、結合部位は MITC の化学的特性から -SH、-NH₂ 等
18 の求核性残基と推定された。このことは、MITC の主要代謝系がグルタチオンに
19 による抱合化であること、また、MITC 投与により肝臓グルタチオンレベルの低下
20 が認められることとよく一致していた。生体内低分子 SH 化合物の主成分である
21 グルタチオンは、*in vivo* においても MITC の生体高分子物質への親電子的な結
22 合をグルタチオン抱合化によって抑制し、生体高分子物質を保護しているものと
23 考えられた。(参照 2)

24

【永田専門委員より】

網掛け部「結合」について、何に対する結合なのか明確ではありません。

25
26
27
28

1

表 4 [met-¹⁴C]MITC の生体高分子物質との *in vitro* 共有結合

試験系	結合放射能 (μmol)	対比 (%)
肝ホモジネート 9,000 g 上清		
煮沸酵素基本酵素系	0.268	100
+1 mM システイン	0.211	79*
+1 mM グルタチオン	0.211	79*
native 酵素基本酵素系	0.049	18*
-NADPH	0.157	59*
+1 mM グルタチオン	0.015	6*
+1 mM SKF525A	0.051	19*
肝ミクロソーム画分		
煮沸酵素基本酵素系	0.187	100
native 酵素基本酵素系	0.121	65*
-NADPH	0.123	65*

2 注) 基本酵素系: [met-¹⁴C]MITC 0.5 μmol、NADPH 生成系、塩化マグネシウム 5 μmol
3 及びラット肝ホモジネート 9,000 g 上清又は肝ミクロソーム画分 (肝臓 240 mg 相当) を含む
4 1 mL の 0.2M トリス-塩酸緩衝液 (pH 7.4)。好氣的条件下、37°C で 20 分間反応させ、5%
5 TCA により反応を停止。*: P<0.01

6

7

③代謝

8

体内分布試験[1. (1)②a.]、尿、糞及び呼気中排泄試験[1. (1)④a.]並びに胆汁
9 中排泄試験[1. (1)④b.]で得られた試料を用いて代謝物同定・定量試験が実施さ
10 れた。

11 呼気、尿、胆汁及び組織中の代謝物は表 5 に示されている。

12 呼気中に排泄された放射能は、捕集液のモノエタノールアミンを濃塩酸に滴下
13 し、生じた気体を水酸化バリウムと反応させた結果、放射性の炭酸バリウムが形
14 成されたことから、CO₂ が主体 (84%TRR 以上) であることが示唆された。

15 尿及び胆汁試料の TLC 分析の結果、それぞれ 5 種類以上の放射性代謝物が検
16 出され、尿中放射能の 74.2%TRR を占める主要代謝物は MITC の *N*-アセチルシ
17 ス테인抱合体であるメルカプツール酸 (M03) と同定された。胆汁中では MITC
18 のグルタチオン抱合体 (M01) が 67.9%TRR を占め、微量成分として、尿中の
19 主要代謝物である M03 が 2.0%TRR、MITC のシステイン抱合体 (M02) が
20 4.2%TRR 認められた。

21 MITC の主な代謝経路は、グルタチオン抱合体 (M01) 形成の後、システイン
22 抱合体 (M02) を経てメルカプツール酸 (M03) となって排泄される経路が考え
23 られた。投与された MITC の 56%以上はこの経路によって代謝されると考えら
24 れ、組織残留物中の抽出可能な非結合代謝物の主体は、これら MITC のグルタチ
25 オン関連抱合体であると考えられた。

26 その他の代謝経路として、CO₂ 形成に至る代謝系と未同定の数種類の微量代謝

1 物の形成にかかわる代謝系が存在し、M01 の腸内細菌代謝産物に由来する可能
2 性も考えられた。（参照 2、4）

3
4

表 5 呼気、尿、胆汁及び組織中の代謝物（%TAR）

試料	採取時間	MITC	代謝物
呼気	24 時間	ND	CO ₂ (≥ 5.2)、未同定(≤ 1.0)
	7 日間 ¹⁾	-	CO ₂ (7.1)、未同定(1.4)
尿	6 時間	2.2 ^{#§}	M03(74.2) [#] 、未同定(25.8) [#]
	7 日間 ²⁾	-	M03(56.0)、未同定(19.5)
胆汁	6 時間	ND	M01(67.9) [#] 、未同定(28.2) [#] 、M02(4.2) [#] 、M03(2.0) [#]
肝臓	3 時間	0.03 [§]	M01+M02+M03(1.9)、M04(1.1)
消化管 ³⁾	24 時間	MITC+M01+M02+M03(1.2)、M04(0.7)	
全体組織 ³⁾	24 時間	MITC+M01+M02+M03(10.1)、M04(5.9)	
	7 日間	MITC+M01+M02+M03(4.0)、M04(2.3)	

5
6
7
8
9

¹⁾：24 時間での比率を 7 日間の呼気中排泄率（解析による推定値）に乗じた。

²⁾：6 時間での比率を 7 日間の尿中排泄率に乗じた。

³⁾：肝臓での比率を消化管又は全体組織の分布率に乗じた。

#：%TRR §：別系での測定結果 -：未分析又は該当しない ND：検出されず。

④排泄

a. 尿、糞及び呼気中排泄

12 Wistar ラット（一群雄 5 匹）に[met-¹⁴C]MITC を 20 mg/kg 体重で単回経口
13 投与し、投与 7 日後までの尿及び糞並びに投与 24 時間後までの呼気を採取して
14 排泄試験が実施された。

15 尿、糞及び呼気中排泄率は表 6 に示されている。

16 投与放射能は主に尿中へ排泄され、投与後 7 日の排泄率は尿中に 75.5%TAR、
17 糞中に 2.44%TAR であった。呼気中への排泄は投与後 1 時間で最も多く、24 時
18 間の排泄率は 6.18%TAR であった。（参照 2、4）

19
20

表 6 尿糞及び呼気中排泄率（%TAR）

投与後時間	24 時間	7 日間
尿	70.8	75.5
糞	1.3	2.44
呼気	6.18	8.5 [#]
合計（体外排泄量）	78.3	86.4

21 #：積分法解析による推定値

22
23

b. 胆汁中排泄

24 胆管カニューレを挿入した Wistar ラット（一群雄 5 匹）に[met-¹⁴C]MITC を
25 20 mg/kg 体重で単回経口投与し、胆汁中排泄試験が実施された。

胆汁への排泄は、投与後 24 時間で 10.6%TAR であった。排泄濃度及び排泄速度ともに投与 0.5～1 時間後に最高となった。（参照 2）

（2）ラット②

Wistar ラット（雄、匹数不明）に MITC を 10 mg 単回経口投与し、尿を採取して代謝物分析を実施した結果、MITC の *N*-アセチルシステイン抱合体であるメルカプツール酸（M03）として排泄されることが示された。（参照 5）

（3）ラット③

SD ラット（一群雌雄各 5 匹）に[met-¹⁴C]MITC を 10 mg/kg 体重で単回経口投与し、動物体内運命試験が実施された。

排泄パターンは雌雄でほぼ同様であった。投与後 7 日までに放射能は主に尿中に排泄され（81.0%TAR）、その大部分は投与後 24 時間までに回収された。

投与 7 日後の組織中放射能は、甲状腺（約 1.0 µg/g）及び下垂体（約 0.8 µg/g）で高く、肝臓、腎臓、心臓、肺、脾臓、副腎、筋肉及び卵巣では 0.3～0.5 µg/g、精巣、脂肪、眼、脳、骨、消化管、血液、血漿及びカーカスでは 0.1～0.3 µg/g の濃度であった。

投与後 24 時間の尿中には未変化の MITC は検出されず、主な代謝物として M03 が 65～86%TRR、ほかに 3 種類の極性代謝物が認められた。投与 12 時間後に摘出した肝臓について、水酸化ナトリウムで加熱処理したところ、約 70%TRR がメチルアミン（M05）を主成分とする揮発性物質に変換されたことから、放射能は MITC 又はメルカプツール酸として存在していると考えられた。一方、投与 7 日後の肝臓では、同様の処理で M05 の生成は認められず、MITC 又は抱合体として存在していないと考えられた。各種抽出試験結果から、この時点の放射能は遊離アミノ酸プールには僅かであり、大部分は可溶性及び不溶性タンパクに残留していることが示された。これらのことから、MITC は炭素ユニットにまで完全に代謝され、基礎代謝プールへと取り込まれることが示唆された。（参照 5）

（4）ラット④

SD ラット（一群雌雄各 5 匹）に[iso-¹⁴C]MITC を 4.4 mg/kg 体重（以下 [1. (4)] において「低用量」という。）及び 33 mg/kg 体重（以下 [1. (4)] において「高用量」という。）で単回経口投与後の動物体内運命試験が実施された。また、SD ラット（一群雌雄各 2 匹）に[iso-¹⁴C]MITC を 45 mg/kg 体重で単回経口投与して組織中代謝物分析が行われた。

①血中濃度推移

血漿中薬物動態学的パラメータは表 7 に示されている。

1 低用量投与群では、投与後 0.5 時間で C_{max} に達し、24 時間まで急速に低下し
 2 た。72 時間以降は漸減したが、雌の方が緩慢であった。高用量投与群において
 3 も、投与後 0.5 時間に C_{max} に達した後 24 時間まで急速に低下した。その後漸減
 4 したが、濃度推移は雌雄でほぼ同様であった。（参照 7、8）

5
6 表 7 血漿中薬物動態学的パラメータ

投与量	4.4 mg/kg 体重		33 mg/kg 体重	
	雄	雌	雄	雌
T_{max} (hr)	0.5	0.5	0.5	0.5
C_{max} ($\mu\text{g/g}$)	1.53	1.60	10.6	11.4
$T_{1/2}$ (hr)	73.6	83.7	72.0	70.5
AUC ($\mu\text{g}\cdot\text{hr/mL}$)	16.7	24.2	124	155

7
8 ②体内分布

9 投与後 168 時間の主要臓器及び組織における残留放射能濃度は表 8 に示されて
 10 いる。

11 低用量投与群及び高用量投与群とも、甲状腺、肝臓及び腎臓で比較的高い残留
 12 放射能濃度が認められた。（参照 7、8）

13
14 表 8 投与後 168 時間の主要臓器及び組織における残留放射能濃度 ($\mu\text{g/g}$)

投与群	雄	雌
4.4 mg/kg 体重	甲状腺(0.248)、肝臓(0.119)、腎臓(0.080)、カーカス(0.079)、血液(0.062)、副腎(0.058)、心臓(0.038)、肺(0.037)、消化管(0.036)、眼(0.034)	甲状腺(0.370)、腎臓(0.137)、肝臓(0.107)、血液(0.094)、カーカス(0.080)、骨髄(<0.078)、肺(0.077)、消化管(0.068)、副腎(0.060)、心臓(0.059)
33 mg/kg 体重	甲状腺(1.58)、肝臓(0.89)、腎臓(0.76)、血液(0.67)、カーカス(0.55)、肺(0.41)、副腎(0.38)、心臓(0.30)、眼(0.29)、消化管(0.25)	甲状腺(4.07)、腎臓(1.57)、肺(1.04)、血液(0.91)、カーカス(0.86)、副腎(0.81)、肝臓(0.65)、骨髄(0.62)、心臓(0.51)、卵巣(0.50)

15
16 ③尿及び組織中代謝物

17 尿糞及び呼気中排泄試験[1. (4)④]で得られた尿及び別途組織中代謝物分析用
 18 に採取した肝臓及び腎臓を試料として、TLC 分析による代謝物同定・定量試験
 19 が実施された。

20 低用量投与群の投与後 24 時間に排泄された尿中では、雌雄ラットとも M03 が
 21 最も多く認められ (55.5~62.2%TAR)、そのほか代謝物 M07 及び M02 がそれ
 22 ぞれ 6.4~9.3%TAR 及び 4.1~4.8TAR 認められた。また、未同定代謝物が 1.7
 23 ~4.7%TAR 認められた。高用量投与群においても低用量投与群と類似の代謝パ
 24 ターンであった。

1 肝臓及び腎臓中の主要代謝物は雌雄とも M02 で 6.4~21.2%TRR 認められ、
2 また、未同定代謝物が 31.6~67.0%TRR 認められた。雌雄ラットの肝臓におい
3 て、M03 が 13.3~18.3%TRR 認められたが、腎臓では検出されなかった。(参
4 照 7、8)

6 ④尿、糞及び呼気中排泄

7 尿、糞及び呼気中排泄率は表 9 に示されている。

8 低用量投与群及び高用量投与群とも、80%TAR 以上の放射能が投与後 168 時
9 間以内に尿中へ排泄され、残りの大部分は呼気中から検出された。糞中への排泄
10 は僅かであった。呼気中へ排泄された放射能の大部分は、CO₂ 用トラップから検
11 出された。(参照 7、8)

13 表 9 尿、糞及び呼気中排泄率 (%TAR)

投与量		4.4 mg/kg 体重		33 mg/kg 体重		
性別		雄	雌	雄	雌	
試料	尿	84.4	86.4	87.1	85.6	
	糞	2.74	1.45	1.93	1.83	
	呼気	MITC	0.95	1.51	0.72	1.67
		CO ₂	16.1	14.9	7.32	7.23
		COS/ CS ₂	0.05	0.04	0.43	0.48
	ケージ洗浄液	0.15	0.07	0.18	0.15	
	総回収率	107	106	99.4	99.2	

14 注) 尿、糞及びケージ洗浄液は投与後 168 時間、呼気トラップは投与後 72 時間までの
15 回収率を示す。

17 (5) イヌ

18 ビーグル犬 (一群 6 匹: 雄 2 匹及び雌 4 匹) に [met-¹⁴C]MITC を 0.5 mg/kg
19 体重で単回経口投与し、動物体内運命試験が実施された。

20 血液及び血漿中の放射能濃度は、雌雄でほぼ同様であり、~~つた。~~投与 3~6 時
21 間後に C_{max} とな~~った。~~り、~~投与 72 時間以降の血漿中の放射能濃度は、投与 72~~
22 ~~時間以降に 178 時間の T_{1/2} となった。~~で減衰した。事務局修正

23 投与 7 日後の組織中放射能濃度は、肝臓、次いで甲状腺で高く、CSF 及び骨
24 の濃度が最も低かった。投与 7 日後における体内残留放射能は 16~25%TAR で
25 あった。

26 投与後 7 日までに、57~70%TAR の放射能が排泄物中に回収された。主に尿
27 中に排泄され (50~56%TAR)、糞中への排泄は僅かであった (3~8%TAR)。
28 ほかに、約 7.1%TAR の放射能が揮発性物質として排泄されたが、¹⁴CO₂ の割合
29 は僅かであった。

30 尿中代謝物の組成は雌雄でほぼ同様であったが、ラットとは大きく異なった。

1 (参照 4、5)

2
3 **2. 植物体内運命試験**

4 **(1) トマト**

5 有機物含有量の多い土壌 (Compost soil : 水分 20%、pH6.8) 4L を直径 25 cm
6 のデシケーター 4 個にそれぞれ入れ、各デシケーターに[iso-³⁵S]MITC 400 mg を
7 深さ 5 cm のそれぞれ異なる 5 か所に処理し、[iso-³⁵S]MITC 処理 23 日後、各デ
8 シケーターに植物 I、II 及び III 試料としてそれぞれ 4、5 及び 6 週齢のトマト苗
9 (品種不明) を 1 本ずつ植付け、8、21、30 及び 52 日間栽培後に収穫して、植
10 物体内運命試験が実施された。

11 植付時 4 及び 5 週齢のトマトは根、茎及び葉に、6 週齢のトマトは根、茎、葉、
12 茎頂端・脇芽及び花・花柄の各部位に分けて試料とした。また、[iso-³⁵S]MITC
13 処理後、デシケーターの蓋を閉じ、21 日後まで中の空気を一定の速度で吸引し、
14 処理 22 日後にデシケーターの蓋を開き、土壌中の MITC を除くために攪拌し、
15 蓋をした後、数時間空気を吸引して放射エネルギーを測定した。

16 表 10 にトマト各部位における放射能分布が示されている。

17 放射能は速やかに植物体に吸収され、植付 8 日後には植物 III 試料で 189 µg に
18 達し、主に葉・茎に分布した。植付 30 日後の植物 III 試料では土壌処理放射能の
19 約 1% に相当する 1,680 µg が検出され、主に葉に分布した。週齢の若い植物 I 及
20 び II と比較して植物 III における放射能検出量が高い傾向を示した。

21 表 11 に植物 III 試料各部位における放射性画分の分布が示されている。

22 30 日間及び 52 日間栽培した植物 III 試料の各部位において、主要な放射能は硫
23 酸塩画分に認められた。なお、別途検討した水蒸気蒸留及びアンモニア飽和溶液
24 による捕集画分 (主として MITC として結合した 硫黄イオウ) には、最高 0.15
25 mg/kg のごく微量の放射能が検出されたのみであった 與語専門委員修文。

26 土壌処理後吸引により捕集された試料では、[iso-³⁵S]MITC は処理 22 日後まで
27 に 35.8~39.1% TAR が空気中に揮散した。また、トマト収穫後に各デシケーター
28 から土壌を採取して残留放射能を分析した結果、大部分は MITC の酸化により
29 生成した硫酸塩として存在することが示唆された。

30 以上のことから、[iso-³⁵S]MITC はトマトの根から未変化の MITC ではなく、
31 硫酸塩として吸収されたものと考えられた。吸収された硫酸塩は還元されチオー
32 ル体となり、最終的に含硫アミノ酸の生成に利用されるものと考えられた。(参
33 照 2)

34
35 **表 10 トマト各部位における放射能分布 (µg) #**

栽培日数 ([iso- ³⁵ S]MITC 処理後日数)	8 (31)	21 (44)	30 (53)	52 (75)
---	-----------	------------	------------	------------

植物 I	葉	21.6 [6]	17.7 [5]	94.7 [23]	193 [36]
	莖	2.9 [1.4]	11.1 [4]	24.8 [6]	
	根	9 [8]	5.5 [5]	7.9 [8]	17.8[49]##
	合計	33.5	34.3	128	211
植物 II	葉	50.3 [7]	99 [66]##	500 [50]	491 [9]
	莖	8.5 [1]	21.8 [5]	92.5 [6]	
	根	17.3 [5]	14.5 [5]	25.2 [8]	
	合計	76.1	135	618	491
植物 III	花	-	-	31 [61]	9 [17]
	莖頂端	7.9 [10]	45.8 [18]	142 [13]	65 [14]
	葉	57.0 [7]	809 [66]	1,290 [32]	664[27]
	莖	83.5 [6]	84.9 [5]	175 [6]	283[8]
	根	40.3 [6]	20.8 [5]	40.0 [9]	48.2[10]
	合計	189	961	1,680	1,070

1 #: [iso-³⁵S]MITC における ³⁵S のモル重量%より換算した値 ##: 概算値（正確に秤量できなかったため） -: 試料なし []: 生重量 g
 2
 3 植物 I : 植付時 4 週齢 植物 II : 植付時 5 週齢 植物 III : 植付時 6 週齢
 4
 5

表 11 植物 III 試料各部位における放射性画分の分布 (%TRR)

栽培日数	30 ([iso- ³⁵ S]MITC 処理後 53 日)			52 ([iso- ³⁵ S]MITC 処理後 75 日)		
	放射性画分	硫酸塩	可溶性・有機物結合性硫黄	不溶性・結合性硫黄	硫酸塩	可溶性・有機物結合性硫黄
花・花柄	-	-	-	90	約 7	約 3
莖頂端	65	17	18	81	約 6	13
葉	85	11	4	72	0	28
莖	85	11	4	65	30	5
根	56	21	23	77	11	12

6 -: 試料なし
 7
 8

9 (2) だいこん

10 最大容水量の 40%に水分を調整したドイツ標準土壌 2.2 (壤質砂土) 10 kg に、
 11 [met-¹⁴C]MITC 製剤 1.07 g を処理した (土壌処理濃度 107 mg/kg)。処理土壌
 12 は 0°C まで冷却し、各 5 L 容三角フラスコに処理土壌 2 kg を入れた後、フラスコ
 13 を融解して封入し、25°C の暗条件下で 45 日間培養した。培養終了後にフラスコ
 14 を開封して揮発性物質を除去し、68 日間開放条件でガス抜きを行い、だいこん
 15 (品種不明) を播種して 68 日後に葉部及び根部を全て採取し、植物体内運命試験が実施された。

16 葉部に認められた残留放射能濃度は 4.0 mg/kg であり、そのうちの 55%が抽出
 17 された。抽出性放射能は、TLC でのクロマトグラムから極めて極性の高い物質

1 で構成されていると考えられた。根部における残留放射能濃度は 2.4 mg/kg であ
2 った。残留放射能について各種抽出を行ったところ、6M 塩酸による還流抽出で
3 最も多くの放射能（約 83～95%TRR）が抽出された。また、根部放射能の天然
4 成分における分布を検討した結果、放射能の大部分はタンパク質となったアミノ
5 酸で構成されていることが示唆された。

6 処理土壤中の残留放射能を測定した結果、メタノール/アンモニア混合液及び水
7 酸化ナトリウムによる抽出性放射能及び非抽出性放射能の合計は、フラスコ開封
8 32 日及び 68 日後（播種時）で約 75 mg/kg であり、開封 136 日後（採取時）に
9 は約 50 mg/kg に減少した。非抽出性の放射能は経時的に増加した。なお、播種
10 時における土壤中の未変化の MITC 濃度は 1～2 mg/kg であった。（参照 2）

12 (3) トマト、レタス及びからしな

13 ① *In vitro* 代謝試験

14 土壌燻く^ん蒸試験 [2. (3)③] の対照試験群で採取したトマト（品種：First in
15 the field）及びレタス（品種：Crival 及び Ravel RZ）の葉から作成した直径 10
16 mm のリーフディスクをシャーレの蒸留水 20 mL に浮かべ、[met-¹⁴C]MITC を
17 添加して、19～22℃、恒明条件下で 48 時間培養し *in vitro* 代謝試験が実施され
18 た奥語専門委員修文。

19 トマト及びレタスのリーフディスクにおける *in vitro* 代謝物は表 12 に示され
20 ている。

21 メタノール抽出性放射能の TLC による分析の結果、未変化の MITC は僅か
22 であり、多数の極性代謝物が認められた。トマト及びレタスとも、代謝物として
23 M01 及び M02 が 11.5～23.5%TRR 検出された。また、レタスではアスパラギン
24 酸が認められ（12.5%TRR）、MITC の酸化分解で生成した CO₂ が固定され、
25 L-アスパラギン酸プールに取り込まれたものと考えられた。未同定物質（36.1～
26 47.6%TRR）は、代謝物 M01 のグリシン残基が失われた MITC の S-グルタチオ
27 ン代謝物と推定され、この不安定な代謝物（中間体）がその後グルタミン酸残基
28 を失い、より安定な代謝物 M02 へと変化したものと考えられた。

29 メタノール抽出残渣の塩酸加水分解物中において、共有結合付加体がトマト及
30 びレタスでそれぞれ 2.9%TRR（0.55 mg/kg）及び 3.0%TRR（0.40 mg/kg）認め
31 られた。したがって、*in vitro* 条件で植物が MITC に直接暴露された場合、未変
32 化の MITC はメタノール不溶性の高分子と結合し、共有結合付加体を形成すると
33 考えられた。

34 表 12 トマト及びレタスのリーフディスクにおける *in vitro* 代謝物

代謝物		トマト		レタス	
		mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
メタノール抽	総抽出放射能	16.1	84.9	11.2	83.6

出性放射能	MITC	0.15	0.8	0.06	<0.01
	M01	2.73	14.4	3.13	23.5
	M02	4.19	22.1	1.55	11.5
	アスパラギン酸	-	-	1.68	12.5
	未同定物質	8.99	47.6	4.81	36.1
メタノール非抽出性放射能 (メタノール抽出残渣)	総非抽出性放射能	2.86	15.1	2.21	16.4
	6M HCl 加水分解後の抽出物 (#を除く)	2.05	10.8	1.48	11.0
	MITC 共有結合付加体#	0.55	2.9	0.40	3.0
	6M HCl 加水分解後の非抽出物	0.26	1.4	0.33	2.4
総放射能		18.9	100	13.4	100

1 - : 未検出

2 #: 加水分解後に生成するメチルアミンを *N*-メチル-*N'*-フェニルチオウレアに誘導体化した放射能

3
4 **② トマト苗の根部を介した吸収移行性**

5 トマト苗の根部をガラスバイアル内の水 (9 mL) に浸漬させ、茎はバイアル
6 内のシリコン潤滑油に埋め込んで根部培地からの揮発性物質による汚染を避け
7 た。[met-¹⁴C]MITC を根部培地濃度 0.34 mg/L となるように処理し、葉部放射
8 能を処理後 48 時間まで経時的に測定した。

9 その結果、トマト苗葉部の放射能は経時的に増加し、浸漬終了時の残留値は約
10 3.1 mg/kg であった。浸漬終了時の葉部放射能の 95.7%TRR が抽出されたが、未
11 変化の MITC、代謝物 M01 及び M02 は認められず、抽出放射能は未同定の極性
12 成分で構成されていた。

13
14 **③ 土壌くん蒸試験**

15 ガラス製培養チャンバーに砂壤土を層長 30 cm となるように充填した後、
16 [met-¹⁴C]MITC 製剤を土壌中の有効成分濃度 11.1 mg/kg となるように処理して
17 覆土した。密栓した容器全体を銀箔で覆い、19±1°C で土壌を 7 日間くん蒸 (培
18 養) した。

19 くん蒸後、ガス抜き処理として培養チャンバーの空気吸気口及び排気口を開放
20 し、水分及び二酸化炭素を除去した空気を計 28 日間通気させた。排気口には揮
21 発性物質を捕集する捕集液を接続した。ガス抜きは計 28 日間で終了した。

22 土壌くん蒸試験における試験群の構成は表 13 に示されている。

23
24 **表 13 土壌くん蒸試験における試験群の構成**

試験群	供試作物	栽培条件 (ガラス温室栽培)	植物採取日	採取部位
くん蒸土壌での栽培試験	からしな種子	試験容器内のくん蒸土壌に作物を播種又は植付け	播種後 36 日 (試験 36 日)	茎葉
	レタス種子		播種後 36、43、50、57、70 日	茎葉
	トマ		2 葉期	植付け後 36 日 (試験 36 日)
	マト	4 葉期	播種又は植付け後 36 日に植物を採取したくん蒸土壌を	4 葉期苗植付け後 128 日 (試験 164 日)

	苗		混合し、4 葉期苗を植付け		
くん蒸土壌からの揮発性物質暴露試験		2 葉期	無処理土壌に 2 葉期苗を植付け、くん蒸土壌と同一タンク内に設置、栽培	植付け後 36 日（試験 36 日）	茎葉
対 照 試 験	からしな種子	無処理土壌に供試作物を播種又は植付け		播種後 36 日（試験 36 日）	茎葉
	レタス種子			播種後 36 日（試験 36 日）	茎葉
				播種後 70 日（試験 70 日）	
	トマト苗（2 葉期）			植付け後 36 日（試験 36 日）	
			成熟期		茎葉、果実

1
2 **a. ガス抜き後のくん蒸土壌中放射能**

3 ガス抜き後のくん蒸土壌中放射能は表 14 に示されている。

4 ガス抜き直後に作付け（播種又は植付け）を行った試験 0 日では、くん蒸土壌
5 に約 6.4 mg/kg の放射能が認められたが、未変化の MITC は 0.090 mg/kg
6 （1.4%TAR）に過ぎず、大部分は土壌有機画分への結合残留物であった。

7 試験 36 日及び 164 日後では、無機化及び ¹⁴CO₂ の生成（放出）が進行したこと
8 により、土壌中放射能はそれぞれ約 1.7 mg/kg 及び約 1.3 mg/kg となった。土
9 壌中に未変化の MITC は認められず、試験 0 日と同様に結合残留物が総残留放
10 射能の主成分であった。

11 くん蒸土壌からの揮発性物質は、ガス抜き期間中で累計 20.3%TAR が放出さ
12 れ、内訳は ¹⁴CO₂ が 5.6%TAR、MITC ではない単一有機化合物が 14.7%TAR で
13 あった。播種又は植付け後は無機化が促進され、試験 36 日の時点で累計
14 56.0%TAR が揮発性放射能として回収され、その内訳は ¹⁴CO₂ が 39.1%TAR、
15 有機物が 16.9%TAR であった。播種又は植付け後に放出された未変化の MITC
16 は認められなかった。

17
18 **表 14 ガス抜き後のくん蒸土壌中放射能**

ガス抜き後経過日数 (作付け後日数)		メタノール画分		メタノール /水/ アンモニア 画分	結合 残留物	総残留 放射能	%TAR
		画分中 総放射能	未変化 MITC				
0 (試験 0 日)	mg/kg	0.318	0.090	NA	6.04	6.36	54.7
	%TRR	5.0	1.4 [#]	NA	95.0	100	
36 (試験 36 日)	mg/kg	0.102	-	0.068	1.52	1.69	NA
	%TRR	6.1	-	4.0	89.9	100	
164 (試験 164 日)	mg/kg	0.014	-	0.025	1.22	1.26	11.8
	%TRR	1.1	-	2.0	90.9	100	

19 [#]: 未変化 MITC のみ%TAR を示す - : 検出されず NA : 未測定

20
21 **b. 植物体内の残留放射能**

22 植物体内における残留放射能は表 15 に示されている。

23 くん蒸土壌での播種又は植付け 36 日後の残留放射能量は、レタス茎葉で約 1.3

1 mg/kg と低かったが、からしな茎葉及びトマト茎葉ではそれぞれ約 3.3 mg/kg 及
 2 び 2.9 mg/kg であった。レタス茎葉における放射能残留は経時的に減少した。

3 トマト茎葉では、栽培環境により残留放射能に差が認められた。茎葉の残留放
 4 射能は、土壌中放射能及び土壌からの揮発性放射能に暴露させた場合（くん蒸土
 5 壌での栽培）約 2.9 mg/kg であったが、くん蒸土壌からの揮発性物質のみに暴露
 6 させた場合には約 4.8 mg/kg と高かった。この栽培環境による差から、揮発性物
 7 質の吸収（同化）が植物における主な吸収経路であると考えられ、土壌くん蒸後
 8 に生成した ¹⁴CO₂ が植物体内放射能の主要な供給源であることが示唆された。

9
 10 表 15 植物体内における残留放射能 (mg/kg)

播種（植 付）後 経過日数	からしな （茎葉）		レタス （茎葉）		トマト					
	対照 試験	くん蒸 土壌で の栽培 試験	対照 試験	くん蒸 土壌で の栽培 試験	対照試験		くん蒸土壌で の栽培試験		くん蒸土壌か らの揮発性物 質暴露試験	
					茎葉	果実	茎葉	果実	茎葉	果実
36 日	0.007	3.29	0.004	1.27	0.002	-	2.91	-	4.83	-
50 日	-	-	-	0.554	-	-	-	-	-	-
70 日	-	-	0.003	0.189	-	-	-	-	-	-
成熟期	-	-	-	-	0.003	0.002	-	-	-	-
128 日#	-	-	-	-	-	-	0.227	0.033	-	-

11 -: 測定せず # : 試験第 36 日（ガス抜き後第 36 日）にトマト 4 葉期苗を植付

12
 13 c. トマト及びレタスにおける代謝物分析

14 播種又は植付け 36 日後（試験第 36 日）に採取したトマト及びレタス茎葉では、
 15 くん蒸土壌での栽培試験で 41.5%TRR（トマト茎葉）～54.7%TRR（レタス茎葉）、
 16 くん蒸土壌からの揮発物質暴露試験で 32.8%TRR（トマト茎葉）がそれぞれメタ
 17 ノール抽出されたが、抽出放射能には未変化の MITC 及び代謝物 M01 又は M02
 18 は認められず、未変化の MITC は植物体マトリックスに取り込まれなかったと考
 19 えられた。

20 メタノール抽出残渣の加水分解後、メタノール不溶性の高分子共有結合付加体
 21 がトマトの茎葉で 0.026 mg/kg、果実で 0.0003 mg/kg（くん蒸土壌での栽培試験）
 22 及び茎葉で 0.083 mg/kg（くん蒸土壌からの揮発性物質暴露試験）認められたが、
 23 この値は *in vitro* 代謝試験 [2. (3)①] で MITC を直接リーフディスクに暴露さ
 24 せた値と比較して低かった。また、栽培期間に MITC の土壌からの放出がなかつ
 25 たことから、揮発性物質暴露試験の値は未変化の MITC ではなくその揮発性分解
 26 物に起因すると考えられた。

1 **d. レタス呼吸試験**

2 70 日間にわたって**燻くん**蒸土壌で栽培したレタス茎葉は暗所で $^{14}\text{CO}_2$ を放出
 3 した**【奥語専門員修文】**。48 時間の呼吸試験期間中、4.4%TRR が $^{14}\text{CO}_2$ として放出
 4 され、揮発性物質としての放出は 0.4%TRR であった。[met- ^{14}C]MITC に由来す
 5 る放射能は、炭水化物として植物体の炭素プールに存在していると考えられた。
 6

7 **e. 残留放射能の特徴付け**

8 *In vitro* 代謝試験 [2. (3)①] において[met- ^{14}C]MITC に 48 時間暴露させたト
 9 マトリーフディスクの生化学的分画では、放射能の大部分が低分子量可溶性画分
 10 に存在した。一方、植付け 36 日後に採取したトマト茎葉（くん蒸土壌での栽培
 11 試験）では可溶性画分及び不溶性画分に同程度分布し、可溶性画分の放射能は糖
 12 で構成される中性画分に、不溶性画分の放射能は水溶性多糖類画分に多く存在し
 13 ていた。

14 くん蒸土壌で栽培したレタス及びトマト茎葉並びにくん蒸土壌からの揮発性
 15 物質に暴露させたトマト茎葉の残留放射能が TLE 及び TLC で分析された。

16 表 16 に可溶性低分子画分における放射性成分が示されている。

17 レタス茎葉では放射性グルタミン酸、トマト茎葉では放射性グルタミン酸及び
 18 アスパラギン酸が同定された。
 19

20 **表 16 可溶性低分子画分における放射性成分**

試験		くん蒸土壌での栽培試験			くん蒸土壌か らの揮発性物 質暴露試験
植物部位		レタス茎葉		トマト茎葉	
播種又は植付け後日数		播種 36 日後	播種 43 日後	植付け 36 日後	
グルタミン酸	mg/kg	0.31	微量	0.058	0.043
	%TAR	44.1	7	4.8	2.7
アスパラギン酸	mg/kg	非検出	非検出	0.065	0.016
	%TAR	-	-	5.4	1.0

21
 22 以上のことから、くん蒸土壌で栽培した植物体での残留成分は、天然物質、特
 23 に炭水化物及びアミノ酸（アスパラギン酸、グルタミン酸）で構成され、植物炭
 24 素プール及びアミノ酸プールに取り込まれると考えられた。（参照 2）
 25

26 **3. 土壌中運命試験**

27 **(1) 好氣的土壌中運命試験**

28 砂壤土（ドイツ）を最大容水量の 40%に調製し、インキュベーションフラスコ
 29 に移して密栓、4°C で 3 日間保管した後、[met- ^{14}C]MITC のエタノール溶液をシ

1 リンジにて 104 mg/kg 土壌となるように処理し、フラスコに揮発性物質の捕集装
 2 置を接続し、22±2°Cの暗所で最長 14 日間インキュベートして、好氣的土壌中運
 3 命試験が実施された。

4 好氣的土壌における放射能分布は表 17 に、捕集液及び土壌抽出物における放
 5 射性成分は表 18 に示されている。

6 土壌から抽出される放射能は、処理 0 日後の 94.0%TAR から処理 10 日後には
 7 0.10%TAR と急速に減少した。これに対し、処理 1 日後には揮発性物質として各
 8 捕集液中に認められる放射能が 71.7%TAR 認められた。捕集液中の放射能の大
 9 大部分は、ベンジルアミントラップに認められた。また、CO₂は処理 7 日後に最高
 10 値 4.96%TAR を示した後、約 4%TAR の水準で推移した。

11 ベンジルアミン捕集液及びソックスレー抽出物中の放射性成分は、いずれも未
 12 変化の MITC であった。エタノール及び水抽出物中の放射能の大部分は未変化の
 13 MITC であり、未知成分の U1 及び U2 が認められたが、これらは標識体の不純
 14 物と考えられた。

15 好氣的土壌中における未変化の MITC の半減期は 0.3 日と算出された。MITC
 16 の分解物は CO₂のみであった。（参照 2）

17
18 表 17 好氣的土壌における放射能分布（%TAR）

経過 日 数	捕集液中の放射能					土壌抽出物中の放射能				結合 残留	合計
	ベンジル アミン ¹⁾	水酸化 カルウム ²⁾	硫酸	エチレンガ リコール	計	エタノール	水	ソックスレー	計		
0	ND	ND	ND	ND	-	73.6	11.6	8.67	94.0	1.33	95.3
1	71.7	0.02	ND	ND	71.7	7.70	2.11	5.82	15.6	4.81	92.2
3	85.9	0.57	ND	ND	86.5	0.51	0.81	1.70	3.02	5.80	95.3
7	91.3	4.96	ND	0.02	96.2	-	0.62	0.65	1.27	3.55	101
10	80.2	3.75	ND	ND	84.0	0.10	-	NA	0.10	6.45	90.5
14	84.8	4.00	ND	ND	88.8	NA	NA	NA	-	NA	88.8

19 ¹⁾：高揮発性の MITC を無揮発性の N-ベンジル-N'-メチルチオ尿素に変換 ²⁾：CO₂ 捕集
 20 ND：検出限界（0.01%）以下 NA：未分析 -：未検出又は算定不能

21
22 表 18 捕集液及び土壌抽出物における放射性成分（%TAR）

試料	ベンジルアミ ン捕集液	エタノール抽出物			水抽出物			ソックスレー 抽出物	合計	
		MITC	U1	U2	MITC	U1	U2			
経過 日 数	0	-	69.4	0.55	1.15	11.2	0.25	0.15	8.65	89.3
	1	71.7	5.55	0.65	0.60	1.55	0.30	0.15	5.80	84.6
	2	65.9	3.55	0.20	0.20	1.10	0.40	<0.10	4.40	75.0

	4	95.4	<0.10	<0.10	<0.10	<0.10	0.20	-	0.95	96.3
	7	91.3	-	-	-	-	-	-	0.65	91.9

U1、U2：未知成分 -：未分析

(2) 土壌吸着試験

4 種類の国内土壌 [埴壤土（北海道）、埴壤土（福島）、砂質埴壤土（岡山）及び砂土（宮崎）] に MITC を添加して、土壌吸着試験が実施された。

Freundlich の吸着係数 K_F^{ads} は 0.32~0.68、有機炭素吸着係数 $K_F^{ads}_{OC}$ は 27~46 と算出された。（参照 2）

4. 水中運命試験

(1) 加水分解試験①

pH 5.0（酢酸緩衝液）、pH 7.0（リン酸緩衝液）及び pH 9.0（ホウ酸緩衝液）の各滅菌緩衝液に、[met-¹⁴C]MITC を 76.4 µg/mL となるように添加した後、25 ± 0.1°C の暗所で培養し、経時的に試験溶液を採取して加水分解試験が実施された。

各試験溶液における加水分解物の経時的推移は表 19 に示されている。

いずれの試験溶液においても主な分解物は M05 であった。また、pH 9.0 においては分解物 M06 が検出された。未変化の MITC は、推定半減期が pH 5.0 で 85 時間、pH 7.0 で 490 時間、pH 9.0 で 110 時間であった。（参照 2）

表 19 各試験溶液における加水分解物の経時的推移 (%TAR)

緩衝液 pH		5.0			7.0			9.0		
時間		0.16	76.2	338	0.75	268	792	0.25	96.6	313
MITC		94.5	44.5	5.6	96.6	68.1	30.8	94.6	37.7	12.2
分解物	M05	3.9	47.3	83.0	3.2	16.8	49.3	0.8	24.9	49.2
	M06	-	-	-	-	-	-	0.9	24.8	23.3
	その他	0.7	1.7	1.1	0.2	2.2	2.5	0.4	3.5	1.8
カラム吸着		0.9	2.7	5.7	-	5.1	1.1	3.3	5.9	8.4
合計		100	96.2	95.4	100	92.2	83.7	100	96.8	94.9

-：検出されず

(2) 加水分解試験②

pH 4.0（酢酸緩衝液）、pH 7.0（リン酸緩衝液）及び pH 9.0（ホウ酸緩衝液）の各緩衝液を用いて、非標識 MITC が 50.0 µg/mL となるように滅菌試験溶液を調製した後、25 及び 35°C の暗所でインキュベートし、経時的に試験溶液を採取して加水分解試験が実施された。

MITC の加水分解速度定数及び推定半減期は表 20 に示されている。

MITC は 25°C の各 pH において約 7~70 日の半減期で加水分解された。35°C

ではいずれの pH でも半減期は短くなり、温度の影響を受けることが示唆された。
（参照 7）

表 20 MITC の加水分解速度定数及び推定半減期

pH	試験温度 (°C)	加水分解速度定数 (時間 ⁻¹)	推定半減期 (日)
4.0	25	4.82×10^{-4}	60.0
	35	1.57×10^{-3}	18.4
7.0	25	4.14×10^{-4}	69.8
	35	1.46×10^{-3}	19.8
9.0	25	4.20×10^{-3}	6.87
	35	1.59×10^{-2}	1.81

(3) 水中光分解試験①

滅菌蒸留水及び滅菌自然水〔池水（米国）〕に、[met-¹⁴C]MITC を 5 µg/mL となるように添加した後、最長 10 日間、25±2°C でキセノンランプを用いた光源（光強度：29.7 W/m²、測定波長：290 nm より短波長の光をカット）を照射して水中光分解試験が実施された。なお、光照射区とともに対照として非照射区が設定された。

各試験系における分解物の経時的推移が表 21 に、MITC の光分解速度が表 22 に示されている。

滅菌蒸留水及び滅菌自然水における MITC は、光照射 10 日後にそれぞれ 69.6% TAR 及び 75.3% TAR に減少した。滅菌蒸留水及び滅菌自然水とも主要光分解物として M05 が認められ、その生成量は経時的に緩やかに増加した。ほかは、光照射において分解物はほとんど認められなかった。暗対照試料における分解物は認められなかった。

MITC の推定半減期は、蒸留水で 18.7 日（東京春期太陽光換算：71.4 日）及び自然水で 24.9 日（東京春期太陽光換算：95.1 日）であった。（参照 2）

表 21 各試験系における分解物の経時的推移 (%TAR)

試験系		経過時間 (日)	MITC	M05	未同定分解物	計
照射 試料	滅菌蒸留 水	0	100	ND	ND	100
		2	94.1	5.0	ND	99.1
		6	79.1	18.9	0.7	98.7
		10	69.6	29.9	1.7	101
	滅菌自然 水	0	99.0	ND	ND	99.0
		2	94.4	3.8	ND	98.2
		6	82.5	15.6	1.4	99.5

		10	75.3	22.5	3.0	101
暗 対 照 試 料	滅菌蒸留 水	0	100	ND	ND	100
		6	99.4	ND	ND	99.4
		10	98.7	ND	ND	98.7
	滅菌自然 水	0	99.0	ND	ND	99.0
		6	101	ND	ND	101
		10	101	ND	ND	101

1 ND：検出されず

2
3 表 22 MITC の光分解速度

試験系	DT ₅₀ (日)		DT ₉₀ (日)	
	光照射	春期太陽光 (東京、4~6月)	光照射	春期太陽光 (東京、4~6月)
蒸留水	18.7	71.4	62.2	238
自然水	24.9	95.1	82.8	316

4
5 (4) 水中光分解試験②

6 滅菌自然水〔河川水（茨城）〕及び滅菌蒸留水に、MITC を 5 µg/mL となるよ
7 うに添加した後、14 日間、平均 25.0°C でキセノン光（光強度：37.0 W/m²、測
8 定波長：290 nm より短波長の光をカット）を照射して水中光分解試験が実施さ
9 れた。

10 表 23 に MITC の推定半減期が示されている。

11 MITC は河川水中では緩やかに光分解されることが示唆された。（参照 7）

12
13 表 23 MITC の推定半減期

試験系		推定半減期 (日)
河川水	光照射	28.1
	暗所対照	42.0
蒸留水	光照射	60.8
	暗所対照	64.2

14
15 5. 土壌残留試験

16 火山灰壤土（茨城）及び沖積砂壤土（兵庫）を用いて、MITC を分析対象化合物
17 としての土壌残留試験（ほ場・容器内）が実施された。結果は表 24 に示されている。
18 （参照 2）

19
20 表 24 土壌残留試験成績

試験	処理量	土壌	推定半減期
			MITC

ほ場 試験	120 kg ai/ha# (MITC 換算量 : 110 kg/ha) 土壌注入 1 回処理 (7 日後ガス抜き)	火山灰・壤土 (茨城)	35.7 日
		沖積・砂壤土 (兵庫)	48.6 日
容器 内 試験	112 mg/kg	火山灰・壤土 (茨城)	3.5 時間
		沖積・砂壤土 (兵庫)	4 時間
	95 mg/kg	火山灰・壤土 (茨城)	11.5 時間
		沖積・砂壤土 (兵庫)	2.5 時間

: 油剤 (30.0%) を使用した。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

6. 作物残留試験

国内において野菜等を用いて、MITC を分析対象化合物とした作物残留試験が実施された。結果は別紙 3 に示されている。MITC の最大残留値は、処理 197 日後に収穫されたやまのいも (塊茎) の 0.062 mg/kg であった。(参照 2)

7. 一般薬理試験

MITC のラット、マウス、モルモット及びウサギを用いた一般薬理試験が実施された。結果は表 25 に示されている。(参照 2)

表 25 一般薬理試験

試験の種類	動物種	動物数 /群	投与量 (mg/kg 体重) (投与経路)	最大 無作用量 (mg/kg 体 重)	最小 作用量 (mg/kg 体 重)	結果の概要	
中枢 神経系	一般症状	ddY マウス (Irwin 法)	雄 各 5 匹	0、10、30、 100 (経口)	10	30	30 mg/kg 体重以上で反応性・反射の亢進、過敏等 100 mg/kg 体重で体温低下、摂食不良、腹臥姿勢、異常行動・歩行、呼吸不整、立毛、苦悶反応、振戦等 100 mg/kg 体重で死亡例 (4 例)

試験の種類		動物種	動物数 /群	投与量 (mg/kg 体重) (投与経路)	最大 無作用量 (mg/kg 体 重)	最小 作用量 (mg/kg 体 重)	結果の概要
		日本白色種 ウサギ#			10	30	30 mg/kg 体重以 上で体温低下、姿 勢異常、呼吸促進 100 mg/kg 体重で 自発運動・反応性 減少、粗大呼吸、 筋弛緩、血色不良、 流涙、虹彩赤化 100 mg/kg 体重で 死亡例 (全例)
自律神経・平滑筋系	摘出回腸 の自動運 動に対す る作用	日本白色種 ウサギ	雄 各 3 匹	3.8×10^{-8} 3.8×10^{-7} 3.8×10^{-6} 3.8×10^{-5} g/mL (添加)	3.8×10^{-8} g/mL	3.8×10^{-7} g/mL	回腸の収縮抑制
	摘出回腸 のアゴニスト 収縮に対 する作用	Hartley モルモット	雄 各 5 匹	3.8×10^{-7} 3.8×10^{-6} 3.8×10^{-5} g/mL (添加)	アセチルコリン収縮		アセチルコリン収縮：軽度 抑制 ヒスタミン収縮：影響な し 塩化バリウム収縮：抑 制、後に亢進傾向
					3.8×10^{-6}	3.8×10^{-5}	
					ヒスタミン収縮		
				3.8×10^{-5}	-		
					3.8×10^{-6}	3.8×10^{-5}	
	炭末輸送 能に対す る作用	ddY マウス	雄 各 10 匹	0、10、30、 100 (経口)	30	100	炭末輸送能の抑制
血液	血液凝固に 及ぼす影響	ddY マウス	雄 各 6 匹	0、10、30、 100 (経口)	100	-	影響なし
	溶血に及ぼ す影響	日本白色種 ウサギ	雄 各 3 匹	76、760、 7,600 (<i>in vitro</i>)	760	7,600	溶血

試験の種類	動物種	動物数 /群	投与量 (mg/kg 体重) (投与経路)	最大 無作用量 (mg/kg 体 重)	最小 作用量 (mg/kg 体 重)	結果の概要
呼吸・ 循環器系	雑種 ネコ (麻酔下)	雄 3 匹	100 (経口)	-	100	血圧：一過性に上昇し、その後下降 心電図：QRS 電位低下 呼吸数：減少 心拍数：90 分後まで増加、124~127 分後に呼吸停止の後死亡

- 1 注) 経口投与に使用した溶媒：ゴマ油
 2 - : 最大無作用量又は最小作用量は設定されず
 3 #: 10 mg/kg 体重で一過性の体温低下 (1 例のみ) が認められたが毒性影響ではないと判断した。

4
5
6
7
8
9

8. 急性毒性試験

MITC 原体のラット及びマウスを用いた急性毒性試験が実施された。結果は表 26 に示されている。(参照 2、4、5、7)

表 26 急性毒性試験概要 (原体)

投与経路	動物種	LD ₅₀ (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
経口	Donryu ラット 雄 10 匹	175		活動性亢進、流涙、鼻汁が著明 高用量群で多数例に痙攣及び眼出血 133 mg/kg 体重以上で死亡例
経口	Donryu ラット 雌 10 匹		72	腹ばい及び摂餌量減少 63 mg/kg 体重以上で死亡例
経口	Wistar ラット 雌雄各 5 匹	約 163	約 147	雌雄で呼吸困難、鎮静、よろめき歩行、不全麻痺、攣縮、立毛、脱水症状、流涎及び一般状態の悪化、体重増加抑制 剖検所見において、雌雄の死亡動物で全身性うっ血 生存動物では、68.1 mg/kg 体重で前胃に軽度の腹腔内癒着、100 及び 147 mg/kg 体重で前胃壁の肥厚及び腹腔内癒着 雌雄：147 mg/kg 体重以上で死亡例
経口	dd マウス 雄 10 匹	90		活動性亢進、流涙、鼻汁、痙攣及び眼出血

				59 mg/kg 体重以上で死亡例
経口	dd マウス 雌各 10 匹		104	腹ばい 83 mg/kg 体重以上で死亡例
経口	NMRI マウス 雌雄各 5 匹	約 120	約 100	雌雄で呼吸困難、鎮静、異常 姿勢、よろめき歩行、振戦、 攣縮、立毛及び一般状態の悪 化 さらに雄で痙性歩行、雌で不 全麻痺及び脱水症状 剖検所見において、雌雄の死 亡動物で全身性うっ血 生存動物では、100 mg/kg 体 重（雄 4 例、雌 3 例）で胃腸 管、脾臓及び腹膜の腹腔内癒 着 雌雄：100 mg/kg 体重以上で 死亡例
経皮	Donryu ラット 雄各 10 匹	2,780		活動性亢進、流涙、流涎、角 膜の白濁及び眼出血 2,123 mg/kg 体重以上で死亡 例
経皮	dd マウス 雄各 10 匹	1,870		活動性亢進、流涙、流涎、角 膜の白濁及び眼出血 1,118 mg/kg 体重以上で死亡 例
経皮	Wistar ラット 雌雄各 5 匹	約 1,000	1,930	雌雄で呼吸困難、鎮静、よろ めき歩行、振戦及び一般状態 の悪化 剖検所見において、死亡動物 に全身性うっ血及び腺胃に 出血性潰瘍 投与部位に紅斑、浮腫及び痂 皮形成 雌雄：1,000 mg/kg 体重以上 で死亡例
腹腔内	Donryu ラット 雌雄各 10 匹	54	56	活動低下、腹ばい、ケージ内 動き回り、強直性痙攣及び流 涎 雌雄：48 mg/kg 体重以上で 死亡例
腹腔内	dd マウス 雌雄各 10 匹	82	89	活動低下、ケージ内動き回 り、強直性痙攣、流涎及び流 涙 雌雄：70 mg/kg 体重以上で 死亡例
吸入	SD ラット 雌雄各 5 匹	LC ₅₀ (mg/L)		活動亢進の後、眼刺激、呼吸 困難、活動低下、痙攣及び体 重減少、軽～中度の肺うっ
		1.9	1.9	

				血、肺出血域と肝性変化、胃と小腸のガス膨満及び肺比重量増加（死亡動物） 雌雄：1.5 mg/L 以上で死亡例
--	--	--	--	---

1 注) 経口、皮下及び腹腔内投与：オリーブ油に溶解して投与。経皮投与：キシレンに溶解して刈り
2 毛した背部皮膚に塗布。吸入投与：検体蒸気（濃度 0.6～3.1 mg/L）により 1 時間全身暴露。
3

【松本専門委員より】
網掛け部「高用量群」について、用量を書き込んだ方が分かりやすいと思います。

【事務局より】
参照資料中（抄録及び豪州④資料）に「高用量群」の具体的な投与量の記載がなく、詳細は不明です。

4

5 **9. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験**

6 ウサギ（系統不明）を用いた眼刺激性試験が実施された。その結果、眼に対する
7 刺激性が認められた。

8 NZW ウサギを用いた皮膚刺激性試験が実施された。その結果、皮膚に対する強
9 い刺激性が認められた。

10 Pirbright White 及び Hartley モルモットを用いた皮膚感作性試験
11 (Maximization 法) が実施され、弱い皮膚感作性が認められた。また、Hartley
12 モルモットを用いた皮膚感作性試験 (Maximization 法) が実施された結果、強い
13 紅斑と浮腫が全例に認められ、感作性は陽性であった。（参照 2、4、5）

14

15 **10. 亜急性毒性試験**

16 **(1) 90 日間亜急性毒性試験（ラット）①**

17 Wistar ラット（一群雌雄各 12 匹）を用いた強制経口（原体：0、2、10 及び
18 40 mg/kg 体重/日）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

19 各投与群で認められた毒性所見は表 27 に示されている。

20 本試験において、10 mg/kg 体重/日以上投与群の雌雄で前胃壁肥厚等が認めら
21 れたので、無毒性量は雌雄とも 2 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 2、
22 4、5）

23

24 **表 27 90 日間亜急性毒性試験（ラット）①で認められた毒性所見**

投与群	雄	雌
40 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> ・運動抑制（投与 3 週以降） ・死亡（4 例：投与 5 週以降） ・体重増加抑制及び摂餌量減少 ・Neu 増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動抑制（投与 3 週以降） ・死亡（4 例：投与 5 週以降） ・体重増加抑制 ・Alb 及び ChE 減少

	<ul style="list-style-type: none"> ・Lym 減少 ・副腎絶対及び比重量²増加 ・前胃穿孔性潰瘍 	<ul style="list-style-type: none"> ・前胃穿孔性潰瘍
10 mg/kg 体重/日 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・Glu 増加 ・前胃壁肥厚^{a)} ・肝中心静脈及び小葉間血管周囲の小円形細胞浸潤 	<ul style="list-style-type: none"> ・肝中心静脈及び小葉間血管周囲の小円形細胞浸潤 ・前胃壁肥厚^{a)}
2 mg/kg 体重/日	毒性所見なし	毒性所見なし

a)：粘膜上皮及び角化層の過形成を特徴とする。

(2) 90 日間亜急性毒性試験（ラット）②

Wistar ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた強制経口（原体：0、5、10 及び 20 mg/kg 体重/日）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

各投与群で認められた毒性所見は表 28 に示されている。

本試験において、20 mg/kg 体重/日投与群の雄で WBC 及び Neu の増加等、同投与群の雌で肝うっ血が認められたので、無毒性量は雌雄とも 10 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 2、4、5）

表 28 90 日間亜急性毒性試験（ラット）②で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
20 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> ・WBC 及び Neu 増加 ・Lym 減少 ・肝細胞脂肪変性（小葉中間帯から小葉中心）[#] 	<ul style="list-style-type: none"> ・肝うっ血[#]
10 mg/kg 体重/日 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

#：統計検定が実施されたか不明であるが、検体投与の影響と判断した。

(3) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）①

dd マウス（一群雌雄各 12 匹）を用いた強制経口（原体：0、1、5 及び 20 mg/kg 体重/日）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

各投与群で認められた毒性所見は表 29 に示されている。

本試験において、5 mg/kg 体重/日以上投与群の雄で肝細胞脂肪変性等が、雌で肝出血等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 1 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 2、4、5）

表 29 90 日間亜急性毒性試験（マウス）①で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
20 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> ・BUN 減少 ・前胃肥厚^{#、a)} 	<ul style="list-style-type: none"> ・WBC 減少 ・尿タンパク増加

² 体重比重量を比重量という（以下同じ。）。

		<ul style="list-style-type: none"> ・前胃肥厚^{#, a)} ・肝細胞核大小不同[#]
5 mg/kg 体重/日 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ChE 減少 ・肝小円形細胞浸潤（小葉中心性及び門脈周囲性）[#] ・精巣精子形成異常[#] ・肝細胞脂肪変性[#] 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALT 増加 ・BUN 減少 ・ChE 減少 ・肝小円形細胞浸潤（小葉中心性及び門脈周囲性）[#] ・肝出血[#] ・卵巣絶対及び比重量減少
1 mg/kg 体重/日	毒性所見なし	毒性所見なし

#：統計学的検定が実施されたか不明であるが、検体投与の影響と判断した。

a)：粘膜上皮及び角化層の過形成を特徴とする。

(4) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）②

dd マウス（一群雌雄各 10 匹）を用いた強制経口（原体：0、2.5、5 及び 10 mg/kg 体重/日）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

本試験において、10 mg/kg 体重/日投与群の雄で WBC 及び Neu の増加並びに Lym の減少が認められ、雌では検体投与の影響は認められなかったため、無毒性量は雄で 5 mg/kg 体重/日、雌で本試験の最高用量の 10 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 2、4、5）

(5) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）③

ddY マウス（一群雌雄各 12 匹）を用いた強制経口（原体：0、0.35、0.5、0.7 及び 1 mg/kg 体重/日）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

各投与群で認められた毒性所見は表 30 に示されている。

本試験において、1 mg/kg 体重/日投与群の雄及び 0.7 mg/kg 体重/日以上投与群の雌で肝絶対及び比重量増加等が認められたため、無毒性量は雄で 0.7 mg/kg 体重/日、雌で 0.5 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 2、4、5）

表 30 90 日間亜急性毒性試験（マウス）③で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
1 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> ・Glu 増加 ・肝絶対及び比重量増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・WBC 及び Neu 増加 ・脾絶対及び比重量減少
0.7 mg/kg 体重/日以上	0.7 mg/kg 体重/日以下	・肝絶対及び比重量増加
0.5 mg/kg 体重/日以下	毒性所見なし	毒性所見なし

(6) 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）

ビーグル犬（一群雌雄各 4 匹）を用いた強制経口（原体：0、0.04、0.4 及び 2.0 mg/kg 体重/日）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

各投与群で認められた毒性所見は表 31 に示されている。

0.4 mg/kg 体重/日投与群の雌雄で認められた肝細胞空胞化及び脂肪変性並び

1 に胸腺退縮については、検体投与の影響である可能性が考えられるものの、同投
2 与量で実施された 1 年間慢性毒性試験（イヌ） [11. (1)] における結果を総合的
3 に勘案し、毒性影響ではないと判断した。

4 本試験において、2.0 mg/kg 体重/日投与群の雌雄で肝細胞空胞化及び門脈周囲
5 の脂肪変性等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 0.4 mg/kg 体重/日であると
6 考えられた。（参照 2、4、5、6）

7
8
9
10 表 31 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
2.0 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> 嘔吐（発現時期不明）及び唾液分泌亢進（投与 7 週以降） 肝細胞空胞化及び脂肪変性（門脈周囲） 胸腺退縮 	<ul style="list-style-type: none"> 嘔吐（発現時期不明）及び唾液分泌亢進（投与 7 週以降） 体重増加抑制傾向 肝細胞空胞化及び脂肪変性（門脈周囲） 胸腺退縮
0.4 mg/kg 体重/日以下	毒性所見なし	毒性所見なし

11
12 (7) 90 日間亜急性神経毒性試験（ラット）

13 SD ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた強制経口（原体：0、2、8 及び 32 mg/kg
14 体重/日）投与による 90 日間亜急性神経毒性試験が実施された。

15 各投与群で認められた毒性所見は表 32 に示されている。

16 本試験において、8 mg/kg 体重/日投与群の雌雄で前胃粘膜の肥厚等が認められ
17 たので、無毒性量は雌雄とも 2 mg/kg 体重/日と考えられた。亜急性神経毒性は
18 認められなかった。（参照 2）

19
20 表 32 90 日間亜急性神経毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
32 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> 死亡（1 例：投与 29 日）# 流涎（投与 8 日以降） 体重増加抑制及び摂餌量減少## 自発運動量減少 腹腔内器官の癒着 	<ul style="list-style-type: none"> 死亡（1 例：投与 45 日）# 流涎（投与 10 日以降） 体重増加抑制##及び摂餌量減少## 自発運動量減少 前胃粘膜表面粗造 腹腔内器官の癒着
8 mg/kg 体重/日以上	前胃粘膜肥厚及び表面粗造	前胃粘膜肥厚
2 mg/kg 体重/日	毒性所見なし	毒性所見なし

21 #: 腹腔内器官の癒着、前胃粘膜肥厚、胸水を伴う肺病変（暗赤色化又は多巣性微細黄白色斑）がみ
22 られ、これらの変化が死因と考えられた。

23 ##: 投与 4 及び 8 日後のみに統計学的有意あり。

1
2 **(8) 90 日間亜急性吸入毒性試験（ラット）**

3 Wistar ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた吸入（原体：0、3.16、30.7、137
4 $\mu\text{g/L}$ 、1 日 4 時間/週 5 日鼻部暴露）暴露による 90 日間亜急性吸入毒性試験が実
5 施された。

6 本試験において、最高用量の 137 $\mu\text{g/L}$ 暴露群の雌雄で暴露中の流涎増加、鼻
7 汁、感情鈍麻等の中毒症状並びに体重増加抑制及び摂餌量の減少が認められたの
8 で、無毒性量は雌雄とも 30.7 $\mu\text{g/L}$ であると考えられた。（参照 2、4、5）

9
10 **(9) 1 か月間亜急性経皮毒性試験（ラット）①**

11 SD ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた経皮（原体：0、120、240 及び 480 mg/kg
12 体重/日）投与による 1 か月間亜急性経皮毒性試験が実施された。

13 本試験において、全ての投与群の雌雄で胸腺絶対及び比重量減少、塗布部位皮
14 膚の角化亢進、上皮過形成、潰瘍及び皮下の肉芽が認められ、高用量になるほど
15 潰瘍形成が顕著となった。また、雄の全投与群で体重増加抑制が認められたので、
16 無毒性量は雌雄とも 120 mg/kg 体重/日未満であると考えられた。（参照 2、5）

17
18 **(10) 1 か月間亜急性経皮毒性試験（ラット）②**

19 Wistar ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた経皮（原体：0、1、10 及び 100 mg/kg
20 体重/日）投与による 1 か月間亜急性経皮毒性試験が実施された。

21 塗布部位の皮膚において、1 及び 10 mg/kg 体重/日投与群で刺激作用（剥離及
22 び紅斑）が、100 mg/kg 体重/日投与群で重篤な壊死が観察された。一般毒性で
23 は、100 mg/kg 体重/日投与群で摂餌量減少及び体重増加抑制並びに ChE 減少が、
24 10 mg/kg 体重/日以上投与群で LDH 増加が、1 mg/kg 体重/日以上投与群で用量
25 増加に伴った Alb 増加及び散発的な軽度の肝臓病変が認められたので、無毒性量
26 は 1 mg/kg 体重/日未満であると考えられた。（参照 5）

27
28 **1 1. 慢性毒性試験及び発がん性試験**

29 **(1) 1 年間慢性毒性試験（イヌ）**

30 ビーグル犬（一群雌雄各 6 頭）を用いた強制経口（原体：0、0.04、0.4 及び
31 2.0 mg/kg 体重/日）投与による 1 年間慢性毒性試験が実施された。

32 各投与群で認められた毒性所見は表 33 に示されている。

33 本試験において、2.0 mg/kg 体重/日投与群の雌雄で肝絶対及び比重量の増加等
34 が認められたので、無毒性量は雌雄とも 0.4 mg/kg 体重/日であると考えられた。
35 （参照 2）

36
37 **表 33 1 年間慢性毒性試験（イヌ）で認められた毒性所見**

投与群	雄	雌
-----	---	---

2.0 mg/kg 体重/日	<ul style="list-style-type: none"> ・ PLT 増加 APTT 延長 ・ 肝絶対及び比#重量増加 ・ 肝細胞脂肪変性（門脈周囲）（1 例） 	・ 肝絶対及び比重量増加#
0.4 mg/kg 体重/日以下	毒性所見なし	毒性所見なし

#：統計学的有意差はないが投与の影響と考えられた。

（2）2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）

SD ラット [主群：一群雌雄各 60 匹、衛星群：一群雌雄各 10 匹（投与 53 週及び 4 週休薬後の 57 週に雌雄各 5 匹を中間と殺）を用いた飲水 [原体：0、2、10 及び 50 ppm（衛星群：0 及び 50 ppm）：平均検体摂取量は表 34 参照] 投与による 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験が実施された。

表 34 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		2 ppm	10 ppm	50 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	0.104	0.514	2.33
	雌	0.149	0.746	3.43

検体投与により発生頻度の増加した腫瘍性病変は認められなかった。

本試験において、50 ppm 投与群の雄で体重増加抑制（試験終了時）がみられ、雌では投与による影響は認められなかったため、無毒性量は雄で 10 ppm（0.514 mg/kg 体重/日）、雌で本試験の最高用量 50 ppm（3.43 mg/kg 体重/日）であると考えられた。発がん性は認められなかった。（参照 2、4～6）

（3）2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（マウス）

ICR マウス [主群：一群雌雄各 58 匹、衛星群：一群雌雄各 12 匹（投与 26 週及び 52 週に雌雄各 6 匹を中間と殺）] を用いた飲水（原体：0、5、20、80 及び 200 ppm：平均検体摂取量は表 35 参照）投与による 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験が実施された。

表 35 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（マウス）の平均検体摂取量

投与群		5 ppm	20 ppm	80 ppm	200 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	0.82	3.30	11.8	25.7
	雌	0.91	3.66	13.0	29.0

各投与群で認められた毒性所見は表 36 に示されている。

検体投与により発生頻度の増加した腫瘍性病変は認められなかった。

本試験において、80 ppm 以上投与群の雄で体重増加抑制等が、80 ppm 以上投与群の雌で下垂体絶対及び比重量増加が認められたため、無毒性量は雌雄とも

20 ppm（雄：3.30 mg/kg 体重/日、雌：3.66 mg/kg 体重/日）であると考えられた。発がん性は認められなかった。（参照 2、4～6）

表 36 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（マウス）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
200 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ・ RBC 減少 ・ 網状赤血球増加 ・ 脾及び下垂体絶対及び比重量増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体重増加抑制 ・ 甲状腺及び副腎絶対及び比重量増加
80 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 立毛、被毛光沢欠如[#] ・ 体重増加抑制 ・ Lym 減少 ・ Neu（分葉核）増加 ・ 甲状腺絶対及び比重量増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 立毛、被毛光沢欠如[#] ・ 下垂体絶対及び比重量増加
20 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

[#]：80 ppm 及び 200 ppm 投与群の雌雄とも投与 30 日頃より発現

1 2. 生殖発生毒性試験

(1) 3 世代繁殖試験（ラット）

SD ラット（一群雄 10 匹、雌 20 匹）を用いた強制経口（原体：0、1、3、10 及び 30 mg/kg 体重/日、溶媒：コーン油）投与による 3 世代繁殖試験が実施された。30 mg/kg 体重/日投与群は強い毒性が認められたため、試験開始 5 週間後に中止し、新たに 1 mg/kg 体重/日投与群が設定された。

本試験において、親動物では全ての検体投与群の雌雄で前胃の病変（棘細胞症及び過角化症）が認められた。児動物では検体投与に関連する影響は認められなかったため、無毒性量は親動物で雌雄とも 1 mg/kg 体重/日未満、児動物では雌雄とも本試験の最高用量 10 mg/kg 体重/日であると考えられた。繁殖能に対する影響は認められなかった。（参照 2、4、5）

(2) 2 世代繁殖試験（ラット）

SD ラット（一群雌雄各 30 匹）を用いた飲水（原体：0、2、10 及び 50 ppm：平均検体摂取量は表 37 参照）投与による 2 世代繁殖試験が実施された。

表 37 2 世代繁殖試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		2 ppm	10 ppm	50 ppm	
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	P 世代	雄	0.16	0.76	3.58
		雌	0.21	1.01	4.76
	F ₁ 世代	雄	0.15	0.71	3.40
		雌	0.19	0.87	4.22

本試験において、親動物では P 世代 50 ppm 投与群の雌で下垂体絶対及び比重

1 量の増加が、F₁ 世代 50 ppm 投与群の雄で体重増加抑制が認められ、児動物では
2 投与検体による影響は認められなかったため、無毒性量は親動物で 10 ppm（P：
3 雄 0.76 mg/kg 体重/日、雌 1.01 mg/kg 体重/日、F₁：雄 0.71 mg/kg 体重/日、雌
4 0.87 mg/kg 体重/日）、児動物で本試験の最高用量 50 ppm（P：雄 3.58 mg/kg
5 体重/日、雌 4.76 mg/kg 体重/日、F₁：雄 3.40 mg/kg 体重/日、雌 4.22 mg/kg 体
6 重/日）であると考えられた。繁殖能に対する影響は認められなかった。（参照 2、
7 6）
8

9 (3) 発生毒性試験（ラット）①

10 SD ラット（一群雌 24～28 匹）の妊娠 6～15 日に強制経口（原体：0、1、5
11 及び 25 mg/kg 体重/日、溶媒：コーン油）投与して、発生毒性試験が実施された。

12 各投与群で認められた毒性所見は表 38 に示されている。

13 25 mg/kg 体重投与群の胎児で腎尿管拡張症（11/337 例、3.3%）が認められた
14 が、背景データ（2.7～3.3%）の範囲内であり、検体投与の影響ではないと考え
15 られた。

16 本試験において、5 mg/kg 体重/日以上投与群の母動物で体重増加抑制等が、同
17 投与群の胎児で骨化遅延（頭頂間骨）が認められたため、無毒性量は母動物及び
18 胎児とも 1 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。

19 （参照 2、4、5）
20

21 表 38 発生毒性試験（ラット）①で認められた毒性所見

投与群	母動物	胎児動物
25 mg/kg 体重/日	・摂餌量減少 ・胃粘膜肥厚及び内臓癒着 (24/27 例)	・体重減少 ・頭臀長減少 ・骨化遅延（後頭骨、胸骨分節、 中足骨）
5 mg/kg 体重/日以上	・体重増加抑制*（妊娠 6～ 15 日） ・胃粘膜肥厚（1/28 例）	・骨化遅延（頭頂間骨）
1 mg/kg 体重/日	毒性所見なし	毒性所見なし

22 *：5 mg/kg 体重/日で統計学的有意差は認められないが投与の影響と考えられた。
23

24 (4) 発生毒性試験（ラット）②

25 Wistar ラット（一群雌 25 匹）の妊娠 6～15 日に強制経口（原体：0、3、10
26 及び 30 mg/kg 体重/日、溶媒：コーン油）投与して、発生毒性試験が実施された。

27 母動物では、10 mg/kg 体重/日以上投与群において有意な体重増加抑制（妊娠
28 8～10 日）が認められ、30 mg/kg 体重/日投与群で摂餌量の減少が認められた。
29 また、30 mg/kg 体重/日投与群では胎盤重量の有意な減少がみられたが、黄体数、
30 着床数等への影響は認められなかった。胎児においては、30 mg/kg 体重/日投与

1 群で低体重児数の増加が認められた。

2 本試験において、母動物の無毒性量は 3 mg/kg 体重/日、胎児の無毒性量は 10
3 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。（参照 5、6）

5 (5) 発生毒性試験（ウサギ）①

6 NZW ウサギ（一群雌 17 匹）の妊娠 6～18 日にカプセル経口（原体：0、1、3
7 及び 10 mg/kg 体重/日）投与して、発生毒性試験が実施された。

8 母動物では、3 mg/kg 体重/日以上投与群で死亡（3 mg/kg 体重/日で 1 例、10
9 mg/kg 体重/日で 7 例）、流産（各 1 例）及び体重増加抑制（投与期間中）が認
10 められ、10 mg/kg 体重/日投与群で吸収胚数増加が認められた。胎児では、10
11 mg/kg 体重/日投与群で低体重及び生存胎児数減少が認められた。

12 無毒性量は、母動物で 1 mg/kg 体重/日、胎児で 3 mg/kg 体重/日であると考え
13 られた。催奇形性は認められなかった。（参照 5）

15 (6) 発生毒性試験（ウサギ）②

16 NZW ウサギ（一群雌 16 匹）の妊娠 7～19 日に強制経口（原体：0、1、3 及
17 び 5 mg/kg 体重/日、溶媒：コーン油）投与して、発生毒性試験が実施された。

18 本試験において、5 mg/kg 体重/日投与群の母動物で体重増加抑制傾向（妊娠 7
19 ～19 日）及び摂餌量減少が認められ、同投与群の胎児で低体重及び頭臀長減少
20 が認められたので、無毒性量は母動物及び胎児とも 3 mg/kg 体重/日であると考え
21 られた。催奇形性は認められなかった。（参照 2、4、5）

23 (7) 発生毒性試験（ウサギ）③

24 チンチラウサギ（一群雌 16 匹）の妊娠 6～18 日に強制経口（原体：0、1、3
25 及び 10 mg/kg 体重/日、溶媒：コーン油）投与して、発生毒性試験が実施された。

26 本試験において、母動物では 10 mg/kg 体重/日投与群において体重増加抑制及
27 び摂餌量減少（投与期間中）が認められ、胎児において投与の影響は認められな
28 かったので、無毒性量は母動物で 3 mg/kg 体重/日、胎児で本試験の最高用量 10
29 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。（参照 5、6）

31 1 3. 遺伝毒性試験

32 MITC（原体）の細菌を用いた DNA 修復試験及び復帰突然変異試験、チャイニ
33 ーズハムスター由来 V79 細胞を用いた遺伝子突然変異試験、染色体異常試験及び
34 姉妹染色分体交換試験、ヒトリンパ球を用いた染色体異常試験、ラット初代培養肝
35 細胞を用いた UDS 試験並びにマウスを用いた小核試験が実施された。

36 結果は表 39 に示されているとおり、チャイニーズハムスター由来 V79 細胞及び
37 CHL/IU 細胞を用いた染色体異常試験で陽性であったが、ヒトリンパ球を用いた染
38 色体異常試験及びマウスを用いた *in vivo* 小核試験を含め、その他の試験ではいず

1 れも陰性であったことから、MITC に生体にとって問題となる遺伝毒性はないもの
2 と考えられた。(参照 2、4~6、9)

3
4

表 39 遺伝毒性試験概要 (MITC)

試験	対象	処理濃度・投与量	結果	
in vitro	DNA 修復試験	<i>Bacillus subtilis</i> (H17、M45 株)	20~2,000 µg/7° レート (-S9)	陰性
	DNA 修復試験	<i>B. subtilis</i> (H17、M45 株)	1~10,008 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>Salmonella typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537、TA1538 株)	5~2,500 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537、TA1538 株) <i>Escherichia coli</i> (WP2 _{hcr} 株)	0.5~1,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537、TA1538 株)	10~5,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537 株)	①20~5,000 µg/7° レート (+/-S9) ②30~500 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537 株) <i>E. coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	TA100 株、WP2 <i>uvrA</i> 株： 78.13 ~ 5,000 µg/7° レート (+/-S9) TA1535 株：31.25~1,000 µg/7° レート(-S9)、78.13 ~ 5,000 µg/7° レート(+S9) TA98 株、TA1537 株： 15.63~500 µg/7° レート(-S9)、 15.63 ~ 1,000 µg/7° レート (+S9)	陰性
	遺伝子突然変異試験	チャイニーズハムスター 由来 V79 細胞 (<i>Hgp_rt</i> 座)	①0.1~1.00 µg/mL (-S9) ②0.25~2.50 µg/mL (+S9)	陰性
	染色体異常試験	チャイニーズハムスター 由来 V79 細胞	①0.10~1.00 µg/mL (-S9) ②0.25~2.50 µg/mL (+S9)	陽性
	染色体異常試験	チャイニーズハムスター 線維芽細胞株 (CHL/IU)	①短時間処理法 (6 時間処理) 0.8~6 µg/mL (-S9) 1.8~14 µg/mL (+S9)	陽性#

試験	対象	処理濃度・投与量	結果
		②連続処理法 1.3～5 µg/mL (24 時間処理) 0.6～5 µg/mL (48 時間処理)	
染色体異常試験	ヒトリンパ球	①0.05～0.5 µg/mL (-S9) ②0.1、0.5 及び 1.0 µg/mL (+S9)	陰性
染色体異常試験	ヒトリンパ球	3.0～5.0 µg/mL (+/-S9)	陰性
姉妹染色分体交換試験	チャイニーズハムスター由来 V79 細胞	①0.1～3.5 µg/mL (-S9) ②0.1～5.0 µg/mL (+S9)	陰性
UDS 試験	F344 雄ラット由来初代培養肝細胞	0.253～15.2 µg/mL	陰性
<i>in vivo</i> 小核試験	ICR マウス (骨髄細胞) (一群雌雄各 5 匹)	110 mg/kg 体重 (単回強制経口投与)	陰性

1 注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

2 # : 短時間処理法で陽性、連続処理法で陰性

4 14. その他の試験

5 (1) 消化管に及ぼす影響

6 Wistar ラット (一群雌雄各 10 匹) に単回強制経口 (原体: 50、100 及び 150 mg/kg
7 体重) 又は 10 回反復強制経口 (原体: 25、50 及び 100 mg/kg 体重/日) 投与して、
8 MITC の消化管に及ぼす影響が検討された。

9 単回経口投与では、中毒症状として立毛、発汗及び尾静脈の怒張等が観察された。
10 150 mg/kg 体重投与群では投与 1 時間後に雌雄全例死亡、100 mg/kg 体重投与群で
11 は投与 1～3 日に雌雄で 6～7 例死亡、50 mg/kg 体重投与群では雌で投与 3 時間後
12 までに 3 例の死亡が認められた。剖検所見において、消化管に対する影響の程度に
13 用量との関連がみられ、胃では 50 mg/kg 体重投与群で前胃部胃底尖端に、100
14 mg/kg 体重以上投与群では前胃部全域にわたって著明な充血が認められた。腸管で
15 は空腸、十二指腸に充血斑が散見され、リンパ組織の増生がみられた。

16 10 回反復経口投与では、単回経口投与時と同様の中毒症状及び軟便・黒色便が
17 観察された。100 mg/kg 体重投与群では 2 回の投与で雄 4 例、雌 6 例が死亡したた
18 め、3 日以上投与が中止された。50 mg/kg 体重投与群では雌 2 例が死亡したが、
19 25 mg/kg 体重投与群で死亡は認められなかった。投与による体重増加抑制が著明
20 であった。剖検所見において、消化管全域に軽度の血管怒張があり、胃及び腸管に
21 出血及び潰瘍が認められた。胃の膨満、粘膜の肥厚、弾力性減少が認められるとと
22 もに、隣接臓器との癒着が認められた。

23 MITC は 50 mg/kg 体重以上の単回投与及び 25 mg/kg 体重/日以上反復投与に
24 おいて消化管粘膜に対する直接的な刺激作用があるものと考えられた。(参照 2、
25 5)

1 Ⅲ. 食品健康影響評価

2 参照に挙げた資料を用いて、農薬「MITC」の食品健康影響評価を実施した。

3 ^{14}C で標識した MITC のラットを用いた動物体内運命試験の結果、経口投与後の
4 吸収率は少なくとも **7784.0%** と考えられた永田専門委員修文。放射能分布はほと
5 んどの組織で血漿より高く、高い組織親和性が認められた。体内からの消失は、血
6 球、肝臓、腎臓、脳、脂肪組織等で緩慢であった。投与された放射能は主に尿中に
7 排泄された。投与後 24 時間で呼気中へ **6.18% TAR** の排泄が認められたほか、胆汁
8 への排泄 (**10.6% TAR**) も認められた。主な代謝物として、尿中では MITC のメ
9 ルカプツール酸 (M03)、胆汁中では MITC のグルタチオン抱合体 (M01) 及び
10 システイン抱合体 (M02) が認められた。呼気中放射能は主に $^{14}\text{CO}_2$ であった。

11 ^{14}C で標識した MITC の植物体内運命試験の結果、燻くん蒸土壤中放射能はガス
12 抜き直後で大部分が土壤有機画分への結合残留物であり、播種又は植付け後には無
13 機化及び $^{14}\text{CO}_2$ の生成が進行し、未変化の MITC は認められなかった與語専門委
14 員修文。揮発性物質の吸収 (同化) が植物における主な吸収経路であり、土壤燻く
15 ん蒸後に生成した $^{14}\text{CO}_2$ が植物体内放射能の重要な供給源であると考えられた與
16 語専門委修文。In vitro 代謝試験では、代謝物 M01 及び M02 が **11.5~23.5% TRR**
17 認められた。

18 MITC を分析対象化合物とした作物残留試験の結果、MITC の最大残留値はやま
19 のいも (塊茎) の **0.062 mg/kg** であった。

20 各種毒性試験結果から、MITC 投与による影響は、主に体重 (増加抑制)、肝臓
21 (重量増加、肝細胞脂肪変性等) 及び前胃 (肥厚等) に認められた。神経毒性、発
22 がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性及び生体にとって問題となる遺伝毒性は認
23 められなかった。

24 各試験における無毒性量等は表 40 に、単回経口投与等により惹起されると考え
25 られる毒性影響等は表 41 に示されている。

26 3 世代繁殖試験 (ラット) において親動物の雌雄で無毒性量が設定できなかつた
27 が、より低用量で実施された 2 世代繁殖試験 (ラット) において、無毒性量が得ら
28 れている。

29 食品安全委員会農薬専門調査会は、各試験で得られた無毒性量のうち最小値は、
30 イヌを用いた 90 日間亜急性毒性試験及び 1 年間慢性毒性試験の **0.4 mg/kg 体重/**
31 **日**であったことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した **0.004 mg/kg 体重**
32 **/日**を一日摂取許容量 (ADI) と設定した。

33 MITC の単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響に対する無毒性量
34 のうち最小値は、マウス及びウサギを用いた一般薬理試験の **10 mg/kg 体重**であつ
35 たことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した **0.1 mg/kg 体重**を急性参照
36 用量 (ARfD) と設定した。

37 なお、暴露評価対象物質については総合評価において設定した。

38

1

ADI	0.004 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料①)	亜急性毒性試験
(動物種)	イヌ
(期間)	90 日間
(投与方法)	強制経口投与
(無毒性量)	0.4 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料②)	慢性毒性試験
(動物種)	イヌ
(期間)	1 年間
(投与方法)	強制経口投与
(無毒性量)	0.4 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

2

ARfD	0.1 mg/kg 体重
(ARfD 設定根拠資料)	一般薬理試験
(動物種)	マウス及びウサギ
(期間)	単回
(投与方法)	強制経口投与
(無毒性量)	10 mg/kg 体重
(安全係数)	100

3

【吉田 (緑) 専門委員より】

マウス・ウサギの薬理試験から得られた無毒性量 10mg/kg は、その他試験として行われたラットの消化管に及ぼす影響における複数匹のラットの死亡発現量 50mg/kg と 5 倍、あるいはラット急性毒性試験の死亡発現量と約 6 倍の差しかありません。この点について、および表 41 に記載されている以外の単回投与で起こりうるエンドポイントについて、部会でどのように審議されたのでしょうか。

【事務局より】

部会では、マウス及びウサギ雄 (片性) の一般薬理試験結果だけでなく、他の動物種や試験結果も総合的に判断した場合の数値についても議論されましたが、マウスとラットを比較した場合においても急性毒性でそれほど桁が違ような大きな差は毒性的にない等から、無毒性量 10 mg/kg で安全性は担保されるとの判断がなされました。

4

5 暴露量については、当評価結果を踏まえて暫定基準値の見直しを行う際に確認す
6 ることとする。

1

表 40 各試験における無毒性量等

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) ¹⁾			
			豪州	EU	食品安全委員会農薬専門調査会	参考 (農薬抄録)
ラット	90 日間 亜急性 毒性試験 ①	0、2、10、40	NOEL : - 卵巣重量増加		雌雄 : 2 雌雄 : 前胃肥厚等	雌雄 : 2 雌雄 : 肝小円形細胞浸潤等
	90 日間 亜急性 毒性試験 ②	0、5、10、20	- : 詳細不明		雌雄 : 10 雄 : WBC 及び Neu 増加等 雌 : 肝うっ血	雌雄 : 10 雄 : 肝脂肪変性等 雌 : 肝うっ血
	90 日間 亜急性 神経毒性 試験	0、2、8、32			雌雄 : 2 雌雄 : 前胃粘膜の肥厚等 (亜急性神経毒性は認められない)	雌雄 : 2 雌雄 : 前胃粘膜の肥厚等 (亜急性神経毒性は認められない)
	2 年間 慢性毒性/ 発がん性 併合試験	0、2、10、50 ppm 雄 : 0、0.104、0.514、2.33 雌 : 0、0.149、0.746、3.43	NOEL : 0.47 体重増加抑制、摂餌量及び飲水量減少	NOAEL : 0.44 WBC パラメータの変動等	雄 : 0.514 雌 : 3.43 雄 : 体重増加抑制 雌 : 毒性所見なし	雄 : 0.514 雌 : 0.746 雄 : 体重増加抑制等 雌 : 飲水量減少
	3 世代 繁殖試験	0、1、3、10	NOEL : - 前胃の棘細胞症及び過角化症		親動物 雌雄 : - 児動物 雌雄 : 10	親動物 雌雄 : - 児動物 雌雄 : 10

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) ¹⁾			
			豪州	EU	食品安全委員会農薬専門調査会	参考 (農薬抄録)
			(繁殖能に対する影響は認められない)		親動物 雌雄:前胃の棘細胞症及び過角化症 児動物 雌雄:毒性所見なし (繁殖能に対する影響は認められない)	親動物 雌雄:前胃の棘細胞症及び過角化症 児動物 雌雄:毒性所見なし (繁殖能に対する影響は認められない)
	2世代繁殖試験	0、2、10、50 ppm P雄:0、0.16、0.76、3.58 P雌:0、0.21、1.01、4.76 F ₁ 雄:0、0.15、0.71、3.40 F ₁ 雌:0、0.19、0.87、4.22		NOAEL : 親動物 0.7 児動物 3.6 親動物 体重増加抑制 児動物 毒性所見なし (繁殖能に対する影響は認められない)	親動物 P雄:0.76 P雌:1.01 F ₁ 雄:0.71 F ₁ 雌:0.87 児動物 P雄:3.58 P雌:4.76 F ₁ 雄:3.40 F ₁ 雌:4.22 親動物 雄:体重増加抑制 雌:下垂体絶対及び比重量増加 児動物 雌雄:毒性所見なし	親動物 P雄:0.76 P雌:1.01 F ₁ 雄:0.71 F ₁ 雌:0.87 児動物 P雄:3.58 P雌:4.76 F ₁ 雄:3.40 F ₁ 雌:4.22 親動物 雄:体重増加抑制 雌:下垂体絶対及び比重量増加 児動物 雌雄:毒性所見なし

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) ¹⁾			
			豪州	EU	食品安全委員会農薬専門調査会	参考 (農薬抄録)
					(繁殖能に対する影響は認められない)	(繁殖能に対する影響は認められない)
	発生毒性試験①	0、1、5、25	NOEL : 5 母動物: 体重増加抑制等 胎児: 発育遅延 (催奇形性は認められない)	/	母動物 : 1 胎児 : 1 母動物: 体重増加抑制等 胎児: 骨化遅延 (頭頂間骨) (催奇形性は認められない)	母動物 : 1 胎児 : 5 母動物: 体重増加抑制等 胎児: 体重減少等 (催奇形性は認められない)
	発生毒性試験②	0、3、10、30	NOEL : 母動物 - 胎児 10 母動物: 体重増加抑制 胎児: 矮小児数の増加 (催奇形性は認められない)	NOAEL : 母動物 3 胎児 10 母動物: 体重増加抑制等 胎児: 低体重児の増加等 (催奇形性は認められない)	母動物 : 3 胎児 : 10 母動物: 体重増加抑制 胎児: 低体重児数の増加 (催奇形性は認められない)	/
マウス	90 日間亜急性毒性試験①	0、1、5、20	NOEL : - 卵巣重量減少	/	雌雄 : 1 雄: 肝細胞脂肪変性等	雌雄 : 1 雄 : ChE 減少等 雌 : 卵巣絶対及び比

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) ¹⁾			
			豪州	EU	食品安全委員会農 薬専門調査会	参考 (農薬抄録)
					雌：肝出血等	重量減少
	90 日間亜 急性 毒性試験 ②	0、2.5、5、10	-：詳細不明		雄：5 雌：10 雄：WBC 及び Neu 増加等 雌：毒性所見なし	雄：5 雌：10 雄：WBC 及び Neu 増加等 雌：毒性所見なし
	90 日間亜 急性 毒性試験 ③	0、0.35、0.5、0.7、 1	NOEL：0.7 肝重量増加		雄：0.7 雌：0.5 雌雄：肝絶対及び比 重量増加等	雌雄：0.7 雌雄：肝絶対及び比 重量増加等
	2 年間 慢性毒性/ 発がん性 併合試験	0、5、20、80、200 ppm 雄：0、0.82、3.30、 11.8、25.7 雌：0、0.91、3.66、 13.0、29.0	NOEL：3.48 体重増加抑制、摂餌 量及び飲水量減少 (発がん性は認め られない)	NOAEL：3.3 体重増加抑制等 (発がん性は認め られない)	雄：3.30 雌：3.66 雄：体重増加抑制等 雌：下垂体絶対及び 比重量増加 (発がん性は認め られない)	雄：3.30 雌：3.66 雄：体重増加抑制等 雌：飲水量減少等 (発がん性は認めら れない)
ウサギ	発生毒性 試験①	0、1、3、10	NOEL： 母動物 記載なし 胎 児 - 母動物：体重増加抑 制等		母動物：1 胎 児：3 母動物：体重増加抑 制等	

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) ¹⁾			
			豪州	EU	食品安全委員会農薬専門調査会	参考 (農薬抄録)
			胎児:胸骨不完全骨化		胎児:低体重等 (催奇形性は認められない)	
	発生毒性試験②	0、1、3、5	NOEL : 母動物 5 胎児 5 母動物:体重増加抑制等 胎児:体重減少及び頭臀長減少等 (催奇形性は認められない)		母動物:3 胎児:3 母動物:体重増加抑制傾向等 胎児:低体重及び頭臀長減少 (催奇形性は認められない)	母動物:3 胎児:3 母動物:体重増加抑制等 胎児:体重減少、頭臀長減少等 (催奇形性は認められない)
	発生毒性試験③	0、1、3、10	NOEL : 母動物 3 胎児 10 母動物:体重増加抑制 胎児:毒性所見なし (催奇形性は認められない)	NOAEL : 母動物 3 胎児 10 母動物:体重増加抑制 胎児:毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物:3 胎児:10 母動物:体重増加抑制等 胎児:毒性所見なし (催奇形性は認められない)	

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) ¹⁾			
			豪州	EU	食品安全委員会農 薬専門調査会	参考 (農薬抄録)
イヌ	90 日間 亜急性 毒性試験	0、0.04、0.4、2.0	NOEL : 0.04 肝細胞空胞化及び 脂肪沈着等	NOAEL : 0.4 肝細胞空胞化及び 脂肪沈着等	雌雄 : 0.4 雌雄:肝細胞空胞化 及び門脈周囲の脂 肪変性等	雌雄 : 0.04 雌雄 : 肝細胞空胞化 及び脂肪沈着等
	1 年間 慢性毒性 試験	0、0.04、0.4、2.0	/	/	雌雄 : 0.4 雌雄:肝絶対及び比 重量増加等	雌雄 : 0.4 雌雄 : 肝絶対及び比 重量増加等
ADI			/	NOAEL : 0.4 SF : 100 ADI : 0.004	NOAEL : 0.4 SF : 100 ADI : 0.004	NOAEL : 0.4 SF : 100 ADI : 0.004
ADI 設定根拠資料			/	イヌ 90 日間亜急性 毒性試験	イヌ 90 日間亜急性 毒性試験 イヌ 1 年間慢性毒 性試験	イヌ 1 年間慢性毒性 試験

- 1 注) NOAEL : 無毒性量、NOEL : 無影響量、SF : 安全係数、ADI : 一日許容摂取量、/ : 資料なし
 2 ¹⁾ 無毒性量には最小毒性量又は最小影響量で認められた所見の概要を示す。
 3 - : 設定できず

1 表 41 単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響等

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重)	無毒性量及び急性参照用量設定に関連するエンド ポイント ¹⁾ (mg/kg 体重)
ラット	急性毒性 試験-1	0、88、133、167、 200、300 (雄のみ)	雄：88 未満 雄：活動性亢進、流涙、鼻汁、痙攣及び眼出血
	急性毒性 試験-2	0、53、63、75、90、 108 (雌のみ)	雌：53 未満 雌：腹ばい及び摂餌量減少
	急性毒性 試験-3	0、68.1、100、147、 215	雌雄：68.1 未満 雌雄：呼吸困難、鎮静、よろめき歩行、不全麻痺、 攣縮、立毛、脱水症状、流涎、一般状態の悪化等
マウス	一般薬理試験 (中枢神経系)	0、10、30、100	雄：10 雄：反応性・反射の亢進、過敏等
	急性毒性 試験-1	0、39、59、88、133、 200 (雄のみ)	雄：39 未満 雄：活動性亢進、流涙、鼻汁、痙攣及び眼出血
	急性毒性 試験-2	0、70、83、100、120、 140、170 (雌のみ)	雌：70 未満 雌：腹ばい
	急性毒性 試験-3	0、50、100、200	雌雄：50 未満 雌雄：呼吸困難、鎮静、異常姿勢、よろめき歩行、 振戦、攣縮、立毛、一般状態の悪化等
ネコ	一般薬理試験 (呼吸・循環器 系)	100	雄：100 未満 雄：呼吸数減少、心電図 QRS 電位低下等
ウサギ	一般薬理試験 (中枢神経系)	0、10、30、100	雄：10 雄：体温低下、姿勢異常及び呼吸促進
ARfD			NOAEL：10 SF：100 ARfD：0.1
ARfD 設定根拠資料			マウス及びウサギ一般薬理試験

2 ARfD：急性参照用量 SF：安全係数 NOAEL：無毒性量

3 ¹⁾ 最小毒性量で認められた主な毒性所見を記した。

4

1 <別紙 1：代謝物/分解物略称>

記号	略称	化学名
メチルイソチオシアネート (親化合物)	MITC	methyl isothiocyanate
M01	MITC-S-グルタチオン 抱合体	
M02	MITC-S-システイン 抱合体	
M03	MITCメルカプ ^o ツール酸	
M04	メチルチオカルバモイル-生体 高分子物質結合体	
M05	メチルアミン	methylamine
M06	<i>N,N'</i> -ジメチルチオ尿素	<i>N,N'</i> dimethylthiourea
M07	ピルビン酸誘導体	3-methylthiocarbamoylsulfanyl-2-oxo- propionic acid

2

3

1 <別紙 2：検査値等略称>

略称	名称
ai	有効成分量 (active ingredient)
Alb	アルブミン
ALT	アラニンアミノトランスフェラーゼ [=グルタミン酸ピルビン酸トランスアミナーゼ (GPT)]
ALP	アルカリホスファターゼ
APTT	活性化部分トロンボプラスチン時間
AST	アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ [=グルタミン酸オキサロ酢酸トランスアミナーゼ (GOT)]
BUN	血液尿素窒素
ChE	コリンエステラーゼ
C _{max}	最高濃度
CSF	脳脊髄液
Glob	グロブリン
Glu	グルコース (血糖)
HGPRT	ヒポキサンチン - グアニンホスホリボシルトランスフェラーゼ
HPLC	高速液体クロマトグラフ
LC ₅₀	半数致死濃度
LD ₅₀	半数致死量
Lym	リンパ球数
MCV	平均赤血球容積
NADPH	ニコチンアミドアデニンジヌクレオチドリン酸
Neu	好中球数
PHI	最終使用から収穫までの日数
PLT	血小板数
RBC	赤血球数
T _{1/2}	消失半減期
TAR	総投与 (処理) 放射能
TCA	トリクロロ酢酸
TLC	薄層クロマトグラフ
TLE	薄層電気泳動
T _{max}	最高濃度到達時間
TP	総蛋白質
UDS	不定期 DNA 合成
TRR	総残留放射能
WBC	白血球数

1 <別紙 3 : 作物残留試験成績>

作物名 (栽培形態) (分析部位) 実施年度	試験 ほ場数	使用量 (kg ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)			
					MITC			
					公的分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値
やまのいも (露地) (塊茎) 昭和54年度	1	80	1	197	0.062	0.057	0.051	0.048
	1			243	<0.005	<0.005	<0.003	<0.003
こんにゃく (露地) (球茎) 昭和48,49年度	1	80	1	178	<0.005	<0.005	0.006	0.006
	1			162	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
だいこん (露地) (根部) 昭和47年度	1	80	1	86	<0.03	<0.03	<0.04	<0.04
	1			82	<0.03	<0.03	<0.04	<0.04
だいこん (露地) (葉部) 昭和47年度	1	80	1	86	<0.03	<0.03	<0.04	<0.04
	1			82	<0.03	<0.03	<0.04	<0.04
だいこん (露地) (根部) 昭和50年度	1	80	1	76	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01
	1			81	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01
だいこん (露地) (葉部) 昭和50年度	1	80	1	76	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			81	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
だいこん (露地) (根部) 平成17年度	1	80	1	69	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				76	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				83	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			61	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
だいこん (露地) (葉部) 平成17年度	1	80	1	69	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				76	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				83	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			61	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
だいこん (露地) (つまみ菜・間 引き菜) 平成17年度	1	80	1	22			<0.01	<0.01
				28			<0.01	<0.01
				1	26			0.01
	34					<0.01	<0.01	

作物名 (栽培形態) (分析部位) 実施年度	試験 ほ場数	使用量 (kg ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)			
					MITC			
					公的分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値
かぶ (露地) (根部) 平成元年度	1	80	1	76	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
	1			78	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
かぶ (露地) (葉部) 平成元年度	1	80	1	76	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
	1			78	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
はくさい (露地) (茎葉) 平成11年度	1	80	1	108	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
	1			90	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
キャベツ (露地) (葉球) 昭和58年度	1	80	1	176	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
	1			86	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
ごぼう (露地) (根部) 平成17年度	1	80	1	191	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				198	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				205	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1			161	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				168	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				175	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
レタス (施設) (茎葉) 平成17年度	1	80	1	116	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				123	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				130	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
1	52			<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
	59			<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
	66			<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
ふき (施設) (可食部) 昭和62年度	1	80	1	140	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
	1			155	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
たまねぎ (露地) (鱗茎) 平成18年度	1	92.4	1	194	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				201	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				208	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
		93.2		201	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				208	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				215	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01

作物名 (栽培形態) (分析部位) 実施年度	試験 ほ場数	使用量 (kg ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)			
					MITC			
					公的分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値
	1	80 (植付 14 日前土壌 注入)	1	185	<0.01	<0.01	0.01	0.01
				192	0.01	0.01	<0.01	<0.01
				199	<0.01	<0.01	0.01	0.01
		80 (植付 21 日前土壌 注入)		185	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				192	<0.01	<0.01	0.01	0.01
				199	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
ねぎ (露地) (茎葉) 平成2年度	1	80	1	182	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
	1			146	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
ねぎ (露地) (茎葉) 平成15年度	1	80	1	113	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				120	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				127	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
にんにく (露地) (鱗茎) 平成元年度	1	80	1	292	0.031	0.030	0.036	0.034
	1			239	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
らっきょう (露地) (鱗茎) 昭和59年度	1	80	1	305	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
	1			292	0.013	0.012	<0.005	<0.005
にんじん (露地) (根部) 昭和46年度	1	80	1	134	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05
	1			197	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05
	1	88.8		166	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05
にんじん (露地) (根部) 昭和51年度	1	80	1	233	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05
	1			143	<0.005	<0.005	<0.003	<0.003
トマト (露地) (果実) 昭和49年度	1	80	1	147	<0.005	<0.005	<0.003	<0.003
	1			71	0.018	0.017	0.009	0.008
ミニトマト (施設) (果実) 平成15年度	1	80	1	84	<0.005	<0.005	0.006	0.006
				65	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
				73	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
				80	0.03	0.03	0.03	0.03
				87	<0.01	<0.01	0.01	0.01
				94	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1	80	1	98	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				105	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				112	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01

作物名 (栽培形態) (分析部位) 実施年度	試験 ほ場数	使用量 (kg ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)			
					MITC			
					公的分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値
なす (露地) (果実) 昭和49年度	1	80	1	54	0.012	0.012	0.011	0.011
				75	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
きゅうり (施設) (果実) 昭和47年度	1	80	1	71	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
				84	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
きゅうり (露地) (果実) 昭和47年度	1	80	1	65	<0.003	<0.003	<0.003	<0.003
				76	<0.003	<0.003	<0.003	<0.003
きゅうり (施設) (果実) 昭和50年度	1	80	1	77	<0.003	<0.003	<0.003	<0.003
				88	<0.003	<0.003	<0.003	<0.003
すいか (施設) (果実) 昭和59年度	1	80	1	54	0.005	0.005	0.005	0.005
				63	0.005	0.005	0.006	0.006
メロン (施設) (果実) 昭和62年度	1	80	1	75	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
				67	<0.005	<0.005	0.005	0.005
ほうれんそう (施設) (茎葉) 昭和62年度	1	80	1	78	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
				88	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
ほうれんそう (施設) (茎葉) 平成元年度	1	80	1	94	0.009	0.009	<0.005	<0.005
				114	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
しょうが (露地) (根茎) 平成16年度	1	80	1	112	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
				113	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
いちご	1	80	1	89	0.020	0.018	0.036	0.033
				72	0.006	0.006	0.005	0.005
しょうが (露地) (根茎) 平成16年度	1	80	1	66			0.032	0.031
				57			0.015	0.015
しょうが (露地) (根茎) 平成16年度	1	80	1	159	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				166	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
しょうが (露地) (根茎) 平成16年度	1	80	1	173	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				228	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
しょうが (露地) (根茎) 平成16年度	1	80	1	235	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				242	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
いちご	1	80	1	206	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004

作物名 (栽培形態) (分析部位) 実施年度 (露地) (果実) 昭和48年度	試験 ほ場数	使用量 (kg ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)			
					MITC			
					公的分析機関		社内分析機関	
					最高値	平均値	最高値	平均値
	1			237	<0.005	<0.005	<0.004	<0.004
茶# (露地)	1	100	1	410	/	/	<0.005	<0.005
(あら茶) 昭和56年度	1			423	/	/	<0.005	<0.005
茶# (浸出液)	1	100	1	410	/	/	<0.084	<0.084
昭和56年度	1			423	/	/	<0.084	<0.084

注) 使用製剤：油剤（20%） #：参考

全てのデータが定量限界未満の場合は定量限界値の平均に<を付して記載した。

1
2
3

1 <参照>

- 2 1 食品、添加物の規格基準（昭和 34 年厚生省告示 370 号）の一部を改正する件（平
3 成 17 年 11 月 29 日付け厚生労働省告示第 499 号）
- 4 2 農薬抄録 メチルイソチオシアネート（殺センチュウ及び殺菌剤）（平成 24 年 9
5 月 28 日改訂）：バイエルクロップサイエンス株式会社、一部公表予定
- 6 3 食品健康影響評価について（平成 25 年 6 月 11 日付け厚生労働省発食安 0611 第
7 15 号）
- 8 4 豪州②: Metham Sodium, Dazomet and Methylothiocyanate (MITC). Volume
9 II. NRA Special Review Series 97.2 (1997)
- 10 5 豪州④: Metham Sodium, Dazomet and Methylothiocyanate (MITC). Volume
11 III. NRA Special Review Series 97.2 (1997)
- 12 6 EFSA: Conclusion on the peer review of the pesticide risk assessment of the
13 active substance metham. European Food Safety Authority (2011)
- 14 7 農薬抄録 ダゾメット（殺菌剤）（平成 24 年 8 月 27 日改訂）：アグロカネシヨ
15 ウ株式会社、一部公表予定
- 16 8 農薬抄録 カーバムナトリウム塩（殺土壌病害、殺線虫、殺虫、除草、古株枯死
17 剤）（平成 25 年 2 月 4 日改訂）：三菱商事株式会社、一部公表予定
- 18 9 農薬抄録 カーバム（殺虫剤）（平成 24 年 6 月 29 日改訂）：ダウ・ケミカル日
19 本株式会社、一部公表予定